

NPO 法人み・らいず／大坂
個人別視察レポート集

今回の調査旅行は NPO みらいずの実践を主に見学した。私が参加をしたのは二日目からで、その日は NPO みらいずが運営に関わるフォーラムにお手伝いとして参加させていただいた。フォーラムの概要としては、兵庫県立大学を中心とした地域のコミュニティを発展させることを目的としたもので、その内容は多岐にわたった。その中で私が気になったテーマは、フォーラム中に何度も議論に出てきた「アダプテーションとイノベーションの違い」である。

結論から先に言うと、私はアダプテーションとイノベーションという二つ概念にパネリストたちが語るほどの差異を感じるができなかった。最初に会場でこのテーマを提起した方は、「アダプテーションとはつまり適応のことであり、目の前の状況に取り合えずの解決策を提供することだ。これは政府のやるべきことである。しかし、イノベーションは社会全体の変革を促すような規模の大きなものであり、問題の根本的な解決をするものである。そしてこれが起業家に求められるものである。」という風に語った。しかし、これはイノベーションという言葉の定義が甘い。私たちが解決できることは常に「目の前の問題」でしかないはずであり、その積み重ねをすることでしか社会を変革することはできないからである。イノベーションというと何か革新的な、問題を一気に解決してくれる魔法のようなものが存在するように思ってしまうが、実際に世の中で「イノベーション」として語られているものは全て後付けで、「目の前の問題を地道に解決していった結果」であるものがほとんどである。尼崎市の市長は「アダプテーションとイノベーションの相互補完性」について言及していたが、これはかなり本質をついていると感じた。それは言い換えれば「目の前の問題を解決していくこと（アダプテーション）の積み重ねでしか社会の変革（イノベーション）は達成されない」ということだと思う。

NPO みらいずの実践はまさしくアダプテーションの積み重ねである。待機児童の問題に対する「保育ママ」の事業、鳥貴族と連携をした就労移行支援事業などがそれにあたる。みらいずはそのアダプテーションを、福祉の分野の人たちだけではなく、デザイン系の人など多様な分野の人と多職種連携的に行っている。また、学生ボランティアも 200 人ほど集めている。このように多様な人々をみらいずが巻き込むことができる理由は、みらいずが「楽しく」「おしゃれに」「かっこよく」活動をしているためであろう。福祉や教育の分野では、「正義感」や「責任」が動機になっている団体も多いが、そこにはどこか「暗さ」が付きまとう。「楽しく」なければ、そこに人は集まらない。みらいずで働いている方たちが、「自分たちがやりたいことをやっている」と語った時に、みらいずに人が集まる理由が分かった気がした。言葉の定義を曖昧にしたまま敢えて言うならば、みらいずの実践のような「ポジティブなアダプテーション」こそが、多くの人々を巻き込み社会を変革する「イノベーション」になりえるのだろう。

大阪調査旅行を通して

大学院養護教育専攻1年 古谷理恵

<全体の学びを通して>

今回の調査旅行を通して、自分の将来や自分が今後関わる子どもたちの人生について、深く考える機会となった。病気や障害の有無にかかわらず、できないことや苦手なことは、子どもたち一人ひとりが異なり、少なからず皆が抱えているはずである。私自身、生まれつき体が弱く、現在は生活に不自由することはほとんどないが、他人に劣るところが多くある。どんなに努力してもできないことを諦めた悔しさを味わったこともある。しかし、私にも子どもの頃から、夢があり、理想とする将来像があり、今それに向かって一步一步前進できていると自負している。私はどんな子どもにも、自分が大人になったときにどのようにになりたいか、何を大切にしたいかという思いがあるはずだと思う。今日問題となっている、何に対しても無気力で将来の自分に興味がないとされる子どもでも小さな願いを持っていると考える。それをうまく表現することができなかつたり、子どもたち自身が理解することが難しいという課題があるのではないだろうかと思う。実際に、ボランティア活動でも子どもたちが自分の夢や将来像について話してくれることは多い。病気や障害があるから、何かの理由で学校に通うことができなくなったから、と言って子どもたちの将来への可能性がなくなってしまうのはいけないのである。私たち大人は、子どもたちの希望や夢に気づき、子どもたちに向けてできることをしていく役割がある。

子どもたちの権利を守るための活動を行っている、み・らいず事業やひきこもりフォーラムなどからの学びはとても有意義なものだった。子どもの「今」はもちろんだが、何よりも先を見据えた「将来」に重点を置いた活動が印象的だった。その中で、一教員として、養護教諭として、一人の大人として、子どもたちに何ができるのか、何を伝えていきたいのか、明確にする必要性を強く感じた。子どもたちを取り巻く環境には、さまざまな職種があり、養護教諭に関してはその役割に関する周囲からの認識が薄い。養護教諭も教育に携わる者であるという意識を改めて固めた上で、教育者として、子どもたちにどのようにしてもらいたいのか、そのために何をやる必要があるのか考えていかななくてはならない。また、保健室が子どもたちにとっていつでも来て良い場所、居心地の良い場所、受け入れられる場所にしたいと考える一方で、教員として指導していくべきことがあるということ、規範意識や公共心、道徳心など子どもに養ってほしいと考えていることなど受容するだけでは成り立たないことも多くある。私は養護教諭として、どのような役割を担い、子どもたちに何を伝えていきたいか、確固たるものを持てるよう、日々精進していく覚悟がさらに強まった。そして、子どもたちにとってどのような支援が最も望ましいか、一人ひとりと向き合い、試行錯誤しながらも、常に子どもの立場に立って、関わっていきたい。

<他専攻、他学年の人との関わりを通して>

専門とするものが異なることでここまで、考え方や視点が違うのだろうかと思った。学校現場では、連携の重要性が唱えられているが、育った環境や今までの学びが異なることから、価値観や子ども観なども異なる。そういった中で、連携をうまくとっていくためには、如何にお互いを理解し合うかが重要であると感じた。そのためには役割を知ることから始まる。そして、認め合

うことの重要性とそれでも、曲げることのできない芯の強さを自分が持つことの大切さを感じた。さまざまな人と議論を交わす中で、子どもたちにとっての最善の支援が何かが見えてくる。意見が異なることもあり、それを受け入れることと、自分の意見を、根拠を述べつつ、きちんと相手に理解してもらえるように伝えることが必要である。価値観が異なることに難しさを感じつつも、視点が広がることの面白さも味わうことができた。また根本的には皆が「子どもを大切に思う気持ち」があるという点では同じであるということがわかっているということは大きく、安心して意見を述べることができたと思う。

今後の課題として、自分の考えを価値観の異なる人々に対して如何に根拠とともに示すことができるかということである。今回の自主ゼミでは多くのことを学ぶことができた。そして、議論すること、さまざまな知識を習得することなど普段から行っていくべきことの重大さにも気づくことができた。このような機会を与えてくださったことに感謝し、今後も積極的に、他専攻、他学年の人々とコミュニケーションをとる機会を設けて行きたい。

「つなプロ」調査旅行 大阪

総合社会システム専攻3年 江藤瑞希

<全体としての振り返り>

就労支援を行うセントラルキッチンにおいては、就労する先の業務のプログラムをそのまま作業所で練習しているとのことで、就労移行がスムーズになると感じました。また、み・らいずオリジナルの、障害者の方が働くお店を作るよりもチェーン店への就労に目をつけるこのやり方は東京のような都市部で有効な手立てであると思います。気になることは衛生問題ですが、これは一般の飲食店同様、日頃から徹底した管理をするしかないように思います。一旦衛生問題でなにか不祥事が生じた場合、偏った意見によって再び動き出すことが困難になるかもしれませんが、それはそもそも偏見が社会に根付いているからであり、違うアプローチも使いながら偏った考えを持つ人に歩み寄って行くしかないと思います。今回のことで、大阪の大学生はボランティアに夢中であるということに一番驚きました。立場上み・らいずの方々はどういったボランティアに意欲的な学生に会う機会が多いため、そういう印象をうけやすいのかもしれませんが、わたしの周りにはそういった学生は少ないように思います。わたしもお話聞いた学生のようにバイトよりボランティアを優先するといったことはしたことがありません。そういった意識の違いは何なのか気になりました。また、この自主ゼミを盛り上げるヒントもそこにあるのではないかと事務局の立場から思うところでもありました。自立支援について、さぼりたい時はさぼっても良いとし、全員で外食するときもあるというお話を聞きました。わたしたちも疲れた時は自炊をせずに外食するときもあります。自立訓練だからといってガツガツとやるのではなく、たまには休むというのが普通の人間の生活スタイルなので障害者の方がそれから外れることこそ差別だと気付きました。社会起業家コンペについては、初めてこのような講演を聞きました。優勝した方はみ・らいずの就労支援とは正反対で、障害者の方のみでお店を展開しようとするものでした。「障害者が頑張って作ったお店」を売りにすることは逆にそういった障害者の方と普段から関わりがあったり、福祉関係の人が顧客となり、それ以外の人が近づきにくい場所になる可能性があります。そのことが今後優勝者の方の課題となるのかなと思いました。また、元パティシエの方ということ

もあり、お店を作りたいのか、障害者の方を支援したいのか曖昧なところが感じられた。目的は何なのか、手段と混同することは危険であると気付かされる思いがしました。また、み・らいずのおしゃれなパンフレットや雰囲気は福祉を学ぶ上で本当に忘れてはいけないことであると思います。福祉はどうしても「ださい」「汚い」「かっこわるい」というイメージが強いように思います。福祉や障害関係の団体はよく自らの活動を広告する際に利用者の書いた絵を用いることが多いです。それが一概に悪いこととは言いませんが、わたしはそのことがさらに福祉から距離をとろうとする人を増やしているような気がします。これから福祉にはファッション性やスタイリッシュ性も重要であると思います。

<他専攻との学生との関わりについて>

社会起業家のコンペにおいて理事の方からイノベーションとアダプテーションとの組み合わせに関する意見がありました。わたしはその言葉自体初めて聞いたものでした。その理事の方が「アダプテーションばかりでイノベーションが弱い。相互のコラボが必要である。」とおっしゃっていました。その後の振り返りの際に、C 類の学生からイノベーションとアダプテーションは、結局は同じものなのではないかと、論理的に話す場面がありました。わたしは福祉を専攻していて、もちろん論理を組み立てて話すことも大事だと思いますが、何より現場重視であり、言葉の意味や考え方を深く考えたことがあまりありません。頭で難しいことを悶々と考えているよりも体を動かすことが一番重要であると考えていることが多いです。しかし、C 類が普段どのような授業を受けているのかあまり知りませんが、ひとつの言葉やひとりの専門家の意見を深く考え、その上で自分の意見は何なのかを考えることもまた重要ではないかと思うようになりました。

大阪 NPO 法人み・らいず視察

カウンセリング専攻 4 年 江頭拓也

今回の大阪視察では、主に NPO 法人み・らいずの視察とビジネスプランコンペ edge2014 ファイナル(以下 edge)の参加を行った。

NPO 法人み・らいずは「み・らいずに関わるすべての人がしあわせになれるように」との思いで、「誰もがあたりまえに地域で生きることができる」社会を目指して活動している NPO 法人である。様々な分野の活動を展開しており、アルバイト・ボランティアなどの学生スタッフを多く活用しているのが特徴である。障害のある人や高齢者の人に対する制度上の事業から、制度に含まれない独自の事業など多様な事業を行っているが、それらはいずれも関わっている人達の声から生まれた事業であった。み・らいずに関わる人の困り事や持ちこまれた「こんなものが欲しい」という声にこたえ形にしていくことで現在のみ・らいずになったという話があった。この「必要に応える」ということが、福祉が本来行うべきことであり、誰もがあたりまえに地域で生活するために必要な考え方だと感じる。様々な制度があり、制度にのっとったサービスを行っていると感じた。

edge では、3 人のファイナリストによるプレゼンテーションと今村氏(NPO カタリバ代表理事)のキーノートプレゼンテーション、パネルディスカッションなどが行われた。今村氏も含め今回

のプレゼンテーションを聞き、各人それぞれ自分の中に活動の核となる問題意識を持っていると感じた。その核となる問題は、当事者として、当事者の家族として、支援している現場で気づいたものであり、社会課題でもあった。今回プレゼンテーションをした人たちは、それらの問題を解決する手法としてソーシャルビジネスを選択したのだと感じた。パネルディスカッションの中でも話されていたが、社会的起業やソーシャルビジネスはあくまで手法であり、自分が解決したい課題が何であるかということが重要である。これはみ・らいずの視察で感じたことにも似ており、「解決したい課題」や「こんなものがほしいという声」が先にあり、それを解決するためにソーシャルビジネスの手法や既存の制度を活用するのであり、それらが合わない場合は他の方法を考えるといったことが必要だと感じた。

3 日目は振り返りと意見交換を行った。み・らいずの保育ママという事業に対して、私はみ・らいずのスタッフ初め福祉で働く人が子育てをしながら働くことを応援するために行っている事業としてプラスの面に注目していた。しかし他の学生から、必要な事業であるが子どもを預けて働かないといけないという経済的な問題に注目した生徒もいた。これは私が気づいていなかった視点であり、気づかされた点であった。保育ママの利用者が働く理由が経済的な問題以外にも様々なものがあると思うが、可能性のひとつに気づくことができた。このように問題意識や活動のフィールドがそれぞれ異なる学生と意見を交わすことでそれまで気づかなかった視点や可能性に気づくことができ視野を広げることができた。

つなプロ 大阪合宿

大学院特別支援教育専攻 1 年 佐藤美友貴

<合宿を通して得たこと・考えたこと>

2 日目の午前中は、堺市ユースサポートセンターの状況について松浦さんより伺った。高校生年齢の相談機関や支援機関が少なく、高校中退が深刻な問題となっていることを受け、学校との連携を進めようとしているとのことであった。今年度、私は定時制の高校で教える機会を頂き、目の前で辞めていく生徒に何もできない無力さを感じた。子どもが自らの力で生活していく希望と力を身に着けていけるような関わり方が必要であるが、家庭環境等の要因を考えると、学校という枠組みの中で動くには限界があるという現状もある。

一概に言えることではないが、定時制に通う高校生に対しては特に寄り添って待つ姿勢が必要であると痛感している。2 日の午後には、定時制高校に社団法人が学校を応援する形で居場所をつくるという実践を伺った。社団法人の相談室「うーぱー」における取り組みには、アルバイトの情報提供や授業の欠時管理、金銭教育の講義や GATB 筆記検査の実施などがある。授業中の睡魔を誘うほどのアルバイトは学校の先生は避けたいだろう。発表を受けて、その機能を学校内外のそれぞれの専門家が win-win の関係で果たしていくことは容易な事ではないと感じた。実際、「うーぱー」が入り込むという段階で、受け入れる側の先生に温度差があったそうだ。

先生方は、目の前の生徒に応じて、より生活に根ざした指導を心がけていることが多いと感じる。「学校ができていないから外部が入る」のではなく、「生徒の幸せのために外部と協力する」という視点のもと、完璧な役割分担ではなく、余白を少し残す程度の役割分担をお互いが納得し

た形で進めていくことや、学校の生徒指導、教科指導と全くベクトルを異にするものがない一貫した関わりを心がける必要があると考えた。

「社会的ひきこもり」という性質上、保護者などの周囲の人間が気にかけて相談に来るなどのことが無ければ、支援に結びつくことは難しい。そのため、ひきこもりの段階以前にキャッチアップして支援につなげていくことも今後目指されていくべきであろう。今回のシンポジウムでも、「ひきこもり支援から若者支援への転換」との主張がなされていた。しかし、枠を広げることで言葉に“あいまいさ”が生じ、本当に支援をしたい対象がこぼれ落ちることがあるのではないかと考える。つまり、本人のニーズによって対応していきたいところであるが、明確な記述を避けることは狭間を生み出すことにもつながりかねないと思い、制度設計の難しさを感じた。

<他者とのやりとりを通して得たこと・考えたこと>

2日目午後の分科会は、「②学齢期の若者支援～ひきこもり・学校連携」に参加した。そこでは、定時制の高校に居場所が必要であるという思いから、一般社団法人が高校と連携をして、相談室の運営をおこなっているという実践報告を伺った。相談室には授業の時間になっても居座る生徒がいることもあるそうで、長い目で見て授業に向かっているよう声かけをするとのことであったが、学校の先生はどのように考えているのだろうと疑問を持った。つなプロメンバーの養護教諭専攻の院生と話した際にも、「あの学校の養護教諭はどんな機能を果たしているのだろう、保健室が果たす役割と何が違うのか」と腑に落ちない様子であった。「きっと答えは出ない。モヤモヤするね」という感情を共有し、明確な答えにたどり着けないながらも具体的な話をできたことは非常に有意義であり、更に考えが深まったように思う。

3日目のシンポジウム後、ある2年生と「シンポジウムの形で話をする意味はどこにあるのか」という話になった。その時の私の考えてあった「一つのテーマに関して様々な立場の人の話を聞くことで多面的に捉えることができる気づきを得る」ということを伝え、「必ずしも全員に共感するのではなく、話を聞くことで自分でも納得できることと、逆に違和感を覚えることを精選していけばいいのではないかと話した。以上の内容を言語化したとき、私は今までの自分との変化に気づくことができた。以前の私は、シンポジウムで聞いた話を丸ごと受け入れ、知識を蓄える場と捉えていたからである。何気ない会話であったが、自分の大きな変化に気づくことができたのは、彼女の自然な問いからであった。

今回、多くの学生と同じコンテンツを共有し、相互交流をしたことで、新たな問いに出会ったり、自分の考えをより深めたり、自分の変化に気づくきっかけを得ることができた。

大阪調査旅行 振り返りレポート

総合社会システム専攻2年 三品あや

今回の大阪調査旅行を振り返り、各日の活動を通して感じたこと、考えたことを述べていきたい。一日目の活動では、まず就労支援事業が行われている「EMI フーズ」の見学をした。実際に話を聞いて思ったのは、就労支援を行っているとはいえまだ残っている課題は多いのだ、ということであった。就労支援が行われる場所があることは支援を行う上での大きな第一歩であるが、

就労先として多くの会社と連携したり、障害者というイメージが持つ偏見をなくしたりすることは解決していかなければならない課題であると感じた。次にみ・らいず事務所を訪問しスタッフさんのお話を伺った。み・らいずが行っている多くの支援内容を自分の中で整理することができた。たくさんの内容があったが、どの支援も「利用者のニーズ」を一番に考えた内容であることに感心し、み・らいずの事業内容は私が理想とする福祉の形であるとも感じた。次に保育マールーム、自立体験室の見学をした。保育マールームは、待機児童への対策として始まった支援事業であり、福祉を学んでいてよく出てくる「制度の抜け穴」に対するものとして有効であるのではないかと思った。しかし同時に、保育できる人数に限りがあること、保育料の問題等のお話も聞き、全てのニーズに応えることの難しさも感じた。自立体験室では、実際にあった事例の話をして下さり、支援内容のイメージを鮮明にすることができた。障害者が自立を目指すことに対する支援を行うことの重要性を実感した。最後にみ・らいずの高槻事務所代表である河内さんのお話を伺い、み・らいずの事業内容だけでなく、河内さんが持つ福祉事業に対する考えや思いを感じ取ることもできた。利用者のニーズを第一に考え、それを事業内容として取り入れていく、ということは過程としては単純であるが、それを実際に支援内容として行っていくことは難しさも多いと思う。それを成し遂げているみ・らいずはすごいと強く実感した。一日目の活動を通して、実際に福祉事業を行っている現場でなければ感じとることのできない、支援のリアルな側面というものを感ずることができ、非常に参考になった。またみ・らいずのように、若い力で福祉を担っていくことの大切さも実感した。学生ボランティアを多く募っているという話を伺い、これから福祉を担っていく人材を育成する場としても、み・らいずは魅力的な場所であると感じた。

二日目の活動では、二つのグループに分かれ、私は社会的ひきこもり支援者全国実践交流会に参加するグループで調査を行った。まず、み・らいずの中百舌鳥事務所に行き、スタッフさんのお話を伺った。ひきこもりの支援活動や、堺市ユースサポートセンターについてのお話を聞いて、今まで知らなかった、ひきこもり支援の具体的な状況を知ることができ大変参考になった。午後からは社会的ひきこもり支援者全国実践交流会に参加した。テーマ別実践交流会において、私はひきこもりの高齢化というテーマの講演を聞いた。発表を聞き、ひきこもりの高齢化問題が深刻になっているという事実を知るだけでなく、それに対する支援をどのようにすべきかを考えることができた。発表をして下さったNPO法人の方は二人いらっしゃったが、お二方とも「当事者目線」を大切にしており、ひきこもりの当事者や彼らの親の声に基づいて支援していくことが重要であるとおっしゃっていて、私も納得した。また、ひきこもり支援はとても大変な仕事のわりには低賃金であり、制度がきちんと整っていないことも問題であるということも議論されていた。支援のために欠かせないのが財政基盤であるので、制度の整備は課題であると感じた。ひきこもり支援のためには多くの「見えないニーズ」を把握する必要がある、それには多くの困難も伴うだろう。しかしだからこそ、基盤となる制度をきちんと確立しなければならないということを強く実感した。二日目の活動を通して、ひきこもりという一つの問題に特化して深く考えることができてよかった。

三日目の活動では、二日目に引き続き社会的ひきこもり支援者全国実践交流会に参加した。特別シンポジウムに参加して、「ひきこもり支援から出発して広範な若者支援へ」というテーマで講演を聞いた。中でも印象に残ったのは湯浅誠さんのお話であり、「ひきこもり等の支援がきちんと

行われていない状況があるのは支援する人とならない人の温度差があるからだ」ということを聞き、納得した。社会的に見れば、ひきこもりは個人の問題であり、支援等を行わない、無関心な人も多いのは仕方のないことかもしれない。しかしその差を埋め、人々の関心を向けなければ、制度も変わらず支援も変わらないのだと強く実感した。根本的な問題として、「人々の意識」が挙げられると感じた。

三日間の活動を振り返って、一番反省すべき点は、自分の知識のなさであった。多くの方のお話を聞くことができたが、基本的な知識がなければ質問することさえできない。また、周りの先輩方や友人との話を通し、感想を言い合ったことで、自分の考えの浅はかさも実感した。もっと勉強し、貴重なお話を聞く機会を無駄にしてはいけないと強く感じ、さらに多くの知識を身につけようという意識が高まった。また、今回の調査旅行で一番の学びだったといえる点は、実際の福祉の現場を見たことで、授業で習ったことをより深く理解することができ、座学からでは学ぶことのできない学びができたことである。実際の現場では、授業で学んだような福祉の理想形だけでは上手くいかないことも多いのだと実感し、福祉の世界でのリアルな側面というものを感じ取ることができた。現実を見て、解決を要する多くの問題について、より現実的に考えていくことの必要性を感じた。今回の調査旅行は、私にとって得るものが非常に多かったと思う。今回学んだことを忘れずに、これからも勉強に励んでいきたい。

大阪調査旅行に行って

日本研究専攻 3年 西田素

今回の旅行では、下準備をせずに行ってしまったという後悔がある。サポートステーションの存在を、福祉を学んでいながら知らずにいた。引きこもりについてもどのような実態があるのか、支援団体、方法はどのようなものがあるのか、など何も知らずに行ってしまった。ただただ知識を入れることのみになってしまったことが第一の反省である。

一日目は、日本研究専攻で卒業論文の構想発表があったため、遅れていった。振り返りの際に一日目の話を聞くと、み・らいずの取り組みの面白さが伝わってきた。様々な取り組みをされていたが、障害者の就労支援では、チェーン店で就労を目指すことで全国でも活かせるのではないかと、飲食店はブラック企業だというイメージが強いが、障害者が入ることでそれも覆っていくのではないかと思った。同時に、二日目に行った edge が主催している社会企業家コンペの話も聞き、比較をした感想を聞いた。edge に出ていたというパティシエの話も聞いたが、み・らいずとは対照的な取り組みをしているという。edge に参加したグループの人々の話では、カフェの運営を全て障害者でやるのは現実的ではなく、そのような考え方はありふれている、み・らいずの取り組みの方が現実的であるという話だった。確かにそうだと思う。み・らいずは確実性があり、これから伸びていくのではないかという将来性がある。しかし私は edge のコンペに出ていた人の考え方もありなのではないかと思う。現在の障害者就労の現状を考えると良いほうではあること、そもそもの就労の場が少ないため開拓しなければならない、というところはクリアしているが、み・らいずの取り組みでは、一ヶ月に二万くらいしか稼ぐことができないという条件は変わらず、労働環境の改善にはつながりにくいのではないかと思うためである。障害者の人たちだけが行うこ

とで倦厭する人がいるかもしれないが、本当においしくサービスがよければ定着していくと思う。

二日目、三日目に行った「社会的ひきこもり支援者全国実践交流会 in 大阪」では、二日目は「学齢期の若者支援—ひきこもり・学校連携」、三日目は特別シンポジウムの「ひきこもり支援から出発して広範な若者支援へ」というテーマの話聞いた。どちらも、キーワードは学校であると思う。二日目の最初にみ・らいずが行っているユースサポートセンターのお話を松浦さんに聞いたが、中学校のうちからアプローチしておくことが必要だということを知った。しかし、実際は学校に入り込むことは難しく、実践交流会の中でも実際に高校で相談室（居場所づくり）を行っている団体の話を聞いたが、先生方の協力を得ることがなかなか難しいということだった。学校ができていないからやる、のではなく、もっと子どもを手厚く支援していくために一緒にやっていくスタンスが必要なのではないか。最近、いじめを学校側が見落としとしていて自殺にまで追い詰めしまった、などというニュースがある。学校や加害者に対するバッシングが新聞やマスコミでは激しくされていたが、学校側は故意に見落とししていたわけではないと思う。むしろやろうとしたが、他の業務が多く手が回らなかったのが実情なのではないだろうか。学芸大学で教員養成の授業を受けていて思うことは、授業のメインは授業構成がどのように授業を教えるか、ということである。生徒指導の授業も受けたが、連携のところはさらっと扱うのみであった。そのような授業を受けていて、現場に出た際に福祉と連携していくのは無理ではないかと思う。福祉に対する知識とそれなりに学んできた、という自負が他人と協働することが難しくさせている気がする。

もう一つ思ったことは、引きこもっている子どもにとって、学校に行く意義が見えなくなってしまっているのではないかと、ということである。東日本大震災の時、引きこもっていた人々は出てきたが、日常の生活に戻ってくるとまた家の中で引きこもってしまった、という話も合った。出てこない理由として、外（学校）に出ていく意味の欠如もあるのではないかと。他の様々な理由もあるとは思うが、将来に対する希望や学校で学ぶことの意味の欠如が定時制高校からの引きこもりを含めたドロップアウトにつながると思う。私は今、アルバイトで塾の講師をしているが、その中に家庭の事情から、大学や専門学校は自分で学費を出すように言われ、普通科の学校ではアルバイトが出来ないので定時制に行こうとしている生徒がいる。今は美容師になりたい、という夢があるため高校を受験しようとしているが、一時期は夢がなく、アルバイトをして暮らしていく、と言っていた時期があった。この子は引きこもりにはならないであろうが、自尊心はとても低く、高校にいかなければ美容師になれないから行くという理由が消えてしまったら、学ぶ理由はなくなってしまふ。中退してしまえば、そばに頼れる大人の存在はないため、どうなってしまうのか非常に不安である。学校に行くことで夢がふえるような授業展開は出来ないのだろうか。

様々なニーズを持つ子どもは昔からいたと思う。今になって細かく分類分けされ、その結果よく見えてきただけではないだろうか。見えてきてしまった以上、学校の様々な事務と生徒の指導を一緒に行うことは教員がつぶれてしまうことになるだけだと思う。学校のあり方を私なりに考えてみたい。

大阪を中心に様々な事業を行っている NPO 法人み・らいずに2泊3日にわたりお世話になった。1日目は障害者の就労支援を行っているセントラルキッチン、保育ママ、みらい館、住之江事務所の見学およびみ・らいずの事業について説明を受けた。1日目において、一番印象に残っているのがセントラルキッチンの見学である。セントラルキッチンでは、飲食関係への就職を希望している障害者を対象としており、居酒屋「鳥貴族」の協力のもと、メニューを教えてもらい実践している。そのため、実際に「鳥貴族」に就職したときに仕事内容のギャップが少なく、また、マニュアルがきっちり決められているという特徴が、アスペルガーなどの障害特性に合っている。しかし、そうすると「鳥貴族」以外で就職が難しくなるのではないかとということや協力してくれる企業開拓を進めなくてはならないのではないかとことを思った。規模の大きい会社は一定数の障害者を雇わなくてはならないことや仕込み作業などで従業員の労働時間が労働基準法に抵触してしまうという現状から「鳥貴族」で成功すれば、他の居酒屋チェーン店の開拓も見込め、すでに「鳥貴族」でも70人の雇用希望があるという。たしかに、カフェなどをつくってそこで障害者を雇うよりも全国展開している企業を狙った方が雇用促進につながると思った。より注意をしなくてはいけないのが衛生面だろう。社会にはまだ障害者に対する偏見は残っているので、そこで作ったものに万が一何かあった場合、信頼の回復は健常者が働いているところよりも難しい。

二日目は社会企業家ビジネスプランコンペ「edge」のファイナルの見学に行った。見学にいったのはファイナルだけだったが、そこに至るまで合宿や審議を重ね、プランをよりよく変えたり本当にニーズがあるのか実践したりしている。3人のファイナリストがプレゼンテーションを行ったが、その中で軽度の障害者を雇ってカフェをつくるという事業が1日目に見学に行ったセントラルキッチンの考え方と対照的で印象に残っている。プレゼンテーションをした小笠原さんは自身がパティシエであり、放課後等デイサービスでお菓子作りを教えていたことがきっかけで、成長ができ、自由に安心して働ける場の拡充を目指している。バックヤードの仕事だけでなくキッチンやホールもすべて障害者を採用するというのは、新しい部分だと思う反面、「障害者の働くカフェ」を売りにすることで、そのような問題に対して意識を持っている人しか来ないのではないかと思った。さらに、社会変革性という面において、全国展開を目指すことは、労働者や場所の確保など実現が大変だろう。地域とのつながりがこの事業をより効果的なものにするために大事なことだと思う。

2泊3日にわたってみ・らいずを視察して、ニーズをひとつひとつ拾い集めているということ強く感じた。ニーズに対して手段がなかったら作ればいいというのがいいと思った。NPO連携をして、おしゃれなパンフレットやロゴを作っていて、今までの社会福祉に対するイメージも明るい方向に変わった。そうすることで、学生を巻き込む力も強まって人海戦術も使えるのだろう。また、大学時代のサークルから発足したということやedgeのファイナリストのなかに大学生がいて、自分と変わらない年齢で社会企業したりサークルを立ち上げたりしていることに刺激をうけた。特に、edgeでは分からないこともたくさんあってこれからさらに勉強しようという意識をも

つことができた。

つなプロ視察研修 大阪編

総合社会システム専攻4年 池田真優子

私は、今回の視察では大きく二つ、NPO 法人み・らいずの見学・事業説明と社会的ひきこもり支援者全国実践交流会に参加しました。各二つの参加で最も印象的であったことをテーマに本視察の報告レポートと致します。

1) NPO 法人 み・らいず 「個人のニーズを支援の形に そして社会のニーズに」

み・らいずの事業の内容や体制は以前にも何度かお聞きしていましたが、ここ2、3年でまた大きく、そしてさらに多様になったと感じました。何度聞いてもみ・らいずの魅力だと私が考えるのは「人からニーズを知って、それを支援する仕組みをつくる」という点です。本来、ニーズを持った人を支援するための社会福祉であるはずが、支援者の都合や経済的・地域的な課題のため、利用者が既存の社会資源に当てはめて考えられる、というのは悲しいことによく見られる現象です。堺市ユースサポートセンターの取り組みの説明（若者向けの就職応援セミナーのようなもの）の中で松浦さんが「〇〇さんのためにそのプログラムをつくったら、やっぱり実際にはそれを必要としている人がいっぱいいるから今は定員オーバー状態」と話していました。今までないものが今まで必要なかったわけではなく、今までそのニーズに社会が注目できずにいた、または注目しないようにしていただけではないかと思います。個人のニーズを形にする仕組みを持ち、しかも個人のニーズが社会のニーズになり得ると経験として知っており、どんどん形にできる法人は貴重で、そして大きな強みをもっていると思いました。

さらに、み・らいずの場合、このニーズアセスメントが利用者のみが対象ではなく、学生や職員にも向けられていることはとても印象深いです。み・らいずの就職案内パンフレットは以前から大きく変わっており、「学生が働きたくなるようなパンフレットを」と、デザイン性の高いものに作り替えられていました。福祉の業界がいわゆる”3K”ではなく、これから「働きたい、魅力的な職場」と多くの学生や若者に認識してもらうことを目的としたこのような取り組みはとても有意義だと感じました。また、今回見学した子育てママ（福祉業界で働く母親をもつ子供の保育事業）は本年度より開始され、これから福祉業界で働く女性の一人として私は大きな期待をしています。この事業はもともと子育てが一段落した母親が自宅で少人数の子供を保育する事業として前根的に始められましたが、実際の普及率はあまり高くないと聞いています。しかし、大きな施設設備や専門職配置の基準が低く、気軽に始められる保育事業として、待機児童解消にも今後大きな役割を担う期待がされています。み・らいずは個人が自宅で保育を行う敷居の高さを理解した上で、制度的な制約の少ない本事業を活用し、現在5人の福祉職として働く母親をもつ子供たちの保育を行っています。大手企業が働く女性を応援する保育システムを導入しつつある中、限られた人員で運営される福祉法人・NPO法人は独自のシステムをもちにくく、保育園の入園が認められない期間は職場復帰が非常に困難な状況にあります。採算性の懸念や、さらに8:30~18:00の保育時間の中でどれほどニーズを満たせるかの疑問も感じますが、女性の働きやすい職場環境

づくりの一步として今後この事業がどのようになっていくか、注目したいと思います。

2) 社会的ひきこもり支援者全国実践交流会 「ひきこもり支援における他職種連携の課題」

まず、私は5年間福祉を専攻して学んできたにも関わらず、若者のひきこもり問題に関しては本当にきちんと触れずにきてしまったと今回のシンポジウム参加で深く反省しました。不登校、学習や就職活動、就職での失敗体験の積み重ね、発達障害・精神障害、心理的ストレス、など原因となる要因は珍しくないものだと思いますが、これが長期間にわたって解決されず、複数の要因が「ひきこまらざるをえない」くらいに絡み合い、単一的な支援ではどうにもならなくなってしまった結果がひきこもりなのだと思います。

2日目のシンポジウムの中でたびたび登壇者が訴えていたのは、現在の若者支援は従来の就労支援・学習支援などでは解決できない、ということ、そしていかに現在のひきこもり支援が専門職間の協働を必要とするのに、様々な課題があるかということでした。若者サポートステーションの事業が開始され、現在若者の幅広い相談や支援活動が期待されていますが、ひきこもりの若者が抱える問題はあまりにも複雑かつ多様で、解決には長い道のりを要するそうです。例えば、学校を中退し、就職にも至らず、ひきこもる若者の支援を考える上で、本来は学校を中退した原因をアセスメントし、中退という選択肢が本当に本人が望んでいるものであったのかを考えてから支援をすることが望ましいと考えます。しかし、現実には、中退、一度教育から離れてしまった若者を“復学”させるための支援は非常に難しく、この段階の検討をしないまま、彼らの就職支援を開始するとのことでした。国の政策として、若者支援は貴重な労働人口を労働につなげるための支援ですから、ある程度の成果が求められていることも理解はできます。しかし、本当に当事者本人の視点に立つと、新たな試みが必要なのではないかと思います。

このような状況を見ると、現在のひきこもりの若者支援は「ひきこもった状況」がまず前提としてあり、それをいかに解消していくかが中心であると言えます。この段階では中退してしまった学校関係者が彼らの支援体制に介入することが困難となることや、就職以外の選択肢が考えにくくなります。私は今後重要であるのは、いかに課題を有する若者を事前に見落とさないか、学校関係者、地域、社会福祉支援者が連携してアウトリーチに努めることではないかと考えます。福祉と教育は現場レベルでは連携の際に多くの困難が存在するとはよく言われることですが、実際にお互いの役割を理解し、自分のすべき支援を理解すると、その溝は解消されていくのではと思います。今回のゼミのテーマは他職種の連携です。このテーマを見た他専攻の学生が、ひきこもりの若者を生まないアウトリーチにおいて、お互いにどのような役割を期待するか、そして自分はどのような専門性を発揮できると考えるか、今後検討していければ、と思います。

つなプロ大阪調査旅行レポート

総合社会システム専攻2年 中山はる香

今回の旅行で大きく感じたことは、三つあります。一つ目は、**福祉という分野における宣伝力の重要性**、二つ目は、**他分野との連携の必要性**、三つ目が、**NPO という組織の特殊性**です。一つ目の宣伝力の重要性というのは、福祉という分野に大学生のボランティアを本当にうまく活用し

ている、み・らいずのやり方を見ていて強く感じさせられました。福祉は、多くの人にとって暗くて地味なものにとらえられがちで、特に福祉的なサービスに触れることの少ない若者には特に遠い存在であると考えられるだろうと思います。しかし、若いボランティアの存在は地域福祉の大きな活性剤です。こういった存在に小さく絞って、み・らいずは広報活動をしており、それはかなり成功しているな、と考えさせられました。二日目に行かせていただいた edge のビジネスコンペにおける批評で、アピールしたい、売り込みたいターゲット層を明確にして働きかけを行うことが事業の成功において大事なことである、といったお話がありました。そういったことから、み・らいずは、ボランティアに来てもらいたいターゲットである学生像を明確にしている、そこに効果的に働きかけられているのではないのかな、と感じます。特に、広報費に数百万かける、というのは NPO 法人としては中々できることではないと想像できますが、それに見合うだけの効果があるだろうと決断してできる、というのは、長期目線で組織や地域を考えられている結果なのだろうと思いました。

二つ目の他分野との連携の必要性というのは、み・らいずや、edge においてその他の社会事業を見させていただいて感じたことです。地域福祉の問題の解決において、福祉分野のみの知識や組織だけで解決されることはとても少ない、ということに実際の事業を見て改めて気づかされました。特に、み・らいずは老若男女や障害のあるなしに関わらず「困っている人に必要なサービスを」といったスタンスなので、幅広い分野との連携は必要不可欠であると感じました。例えば、不登校児の個別学習支援一つとっても、教育や教育組織に対する理解がなければならぬし、障害者の就労移行支援をするのなら、飲食業などの企業に対する知識や連携も必要になってきます。いままで、他分野との連携というものを考えていたときに、こちらのことを理解してもらおうといった感覚が個人的に強かったのですが、実際に他の業界と連携して、事業を行っているのを見て、こちらのことを理解してもらおう以上に、他の業界のことを理解していく必要があるのだな、と考えさせられました。特に河内さんが、就労移行支援を始めるにあたって、飲食チェーンでアルバイトをしたといったお話は印象的でした。まずは、自分でやってみてその分野のことを知る、という作業はなかなかできることではないのかもしれませんが、連携を深めていく上でとても大事な作業であるな、と感じました。その河内さんのお話の中で、自分たちでできないことはやってもらっただけ、といったお話も出てきて、他分野と連携する際には、相手の立場、自分たちの立場をはっきりさせていく必要があるのだな、と感じさせられました。自分たちの業界の価値観を大事にしすぎるあまり他の業界の価値観をおさげにしたり、連携の全体像が見えなくなる、といったことがないようにする、といった注意が必要であるなと感じます。

三つ目は NPO という組織の特殊性です。Edge のビジネスプランコンペにおいて、キーノートプレゼンテーションとして、NPO 法人カタリバの代表理事を務める今村久美さんがいらっしていました。私は、そこでカタリバという NPO 法人の活動を聞いて、素晴らしいな、と感じましたが、目に見える効果を上げられる活動ではないことのむずかしさを感じました。世にある多くの事業は営利を求めて目に見える成果を上げる活動していますが、NPO 法人は、特定非営利活動法人という名前の通り、利益を上げることは最大の目的ではありません。そういった活動において、成果が分かりにくいことを信じてやり続けていくことはとても難しいのではないのかな、と私は感じました。カタリバの活動は簡単に言うと、やる気のない若者に自己覚知やエンパワメ

ントを促すといった内容であると私は思いましたが、それは目に見えて数値でわかるものではなく、社会的に必要なものであると思われても、理解者や賛同者が現れなければなかなか続けていくことの難しい活動であるな、と感じます。しかし、そういった厳しい世界においても続けていけるのは、その法人を立ち上げた一人ひとりが、「どうしても逃れられない、見て見ぬふりをすることができない問題」に出会ってしまったのだらうな、といったことを考えさせられました。そういった問題に取り組むというのは、ある意味、労働という枠を飛び越えて、自分と社会のつながりを見出す「仕事」になっているのではないのかな、と感じます。特に今村さんは、NPO 法人を立ち上げた当初は、アルバイトで生計を立てていたというお話で、榊谷さんによると、み・らいずも設立当初は、それだけで生活するには到底至らなかったというお話でした。そういった環境であっても、その仕事に取り組んでいきたい、という職業は、NPO 法人ならではののではないかと考えさせられました。NPO 法人で働いている多くの人と交流して今回、働く、といった意味も深く考えさせられました。

大阪調査旅行 レポート

総合社会システム2年 中島友恵

この調査旅行は自分の中でとても実りあるものとなった。今回の調査旅行で、社会福祉の希望を見た気がした。み・らいずの事務所やセントラルキッチン、自立生活支援ホーム、保育ママルームなどを視察し、障がいのある人、学校へ行きづらい人、いろいろな人が地域でよりよく暮らすことを実現する手助けをしていた。初めは、小さい支援から始まったが、一人ひとりのニーズに答える（社会福祉で重要なこと）うちに、介護保険等も利用するようになり、今のような形になっているようだ。そのプロセスを踏んでいるから、形だけではなくしっかりと働く人が意識を保ち、楽しみながら仕事をしているのだなと考えた。ある人は、「仕事をやっているという感じではない。」とまで述べていた。また、み・らいずは、み・らいずに関わる人すべてを幸せにしたいという気持ちのもと、スタッフの所得保障なども充実させているらしい。このようなことも、スタッフの方がみ・らいずで働くことの原動力になっているといえると思う。そして、セントラルキッチンでとても心に残ったことがある。それは、障害者が企業の中で働けるようにすることを目標としていることである。自分たちでお店をやってもいいのだが、それは少ない人数の障害者しか関わることができない。店舗数を増やすことをしなければ働く場は提供できないのだ。しかし、み・らいずの本拠地大阪では飲食店も多いのでその中に入って働けるようにサポートしていく方が、障害者一人ひとりが社会に出る機会を増やすことにつながる。このことにすごく納得した。障害者のいる世界をそこだけで終わらせるのではなく、開けたものにすることが重要なのだと感じた。

そして、保育ママルームを訪問し、大阪府の政策の話になったとき、わたしは話についていけなかった。なぜなら、大阪府の制度や政策に関する知識がなかったからだ。政策と結びついて、また大阪府に委託されて保育ママルームなどは在るのにもかかわらず、何の政策かわからないまま見学したことを後悔した。施設や事業は国やその都道府県の政策につながっていることが多いということに改めて気づいた。次回の岩手の調査旅行では、事前に岩手の政策や被災地としての

現状を把握したうえで見学に臨もうと思う。

また、社会的ひきこもり支援者全国実践交流会では、まず当事者視点で考えることの重要性を実感した。私は、精神障害・発達障害の若者支援に参加したのだが、司会の人自身がADHD（注意欠如・多動性障害）であり、他にもアスペルガー症候群とADHD（注意欠如・多動性障害）をあわせもつ人や、精神障害者の人など多くの当事者の方が参加していた。多くの人は、自らの声で質問し、意見を述べていた。宮古の障害者就業・生活支援センターみやこの方が事例を発表した際には、本人の無気力で支援がたびたび中断する原因として、「支援過程があっさりしていて、また急ぎすぎている、支援される人が疲れているのではないか」という指摘が精神障害者の人からあった。私は、宮古でされていた支援の流れが大学で習っている流れそのままだな、と思って聞いていたが、それを聞いた後に、当事者からすれば、支援者が考える解決地点に急ぎすぎたのかなと感じた。支援者は当事者の声に耳を傾け続けなければならないのだと考える。

また、ここでも、支援者と他の機関の連携が言われていた。しかし、宮古の事例の場合、支援される男性（Aさん）が通っていた学校への聞き取りなどは行っておらず、Aさんに診断名を下した主治医などともうまく情報交換をしていなかった。このことをみ・らいずのスタッフの方と話しているときに、そのスタッフの方は、一人の子どもを支援するとき、学校と連絡を取り合うことはほとんどない、と言っていた。学校から個人情報だから教えることはできないと言われることが分かっているから聞かないのだそうだ。これを聞いて、学校が閉じられた社会であるとともに、子供を支援していく以上、子供を取り巻く環境にアプローチしていくことは不可欠なはずなのに、どうして個人情報一つでそれが片づけられてしまうのだろうかという疑問に思った。また、今まで大学で学んできた他職種との連携はまだ理想論なのだな、と感じた。

そして、特別シンポジウムを聞いて、いろいろなことがはっきりと見えてきた。湯浅誠さんの講演で、『温度差』についてのお話があった。社会問題について考えている人・深く知っている人と考えていない人・知らない人の間の温度差は、社会福祉政策の対象者をカテゴリ分けし、また線引きを行っているという。例えば、ネットカフェ難民とホームレスは家がないのは同じなのにカテゴリ分けされているし、引きこもりとニートも仕事はしていないことは同じなのに線引きされている。一人ひとりのニーズに合った支援をしていくべきだということはわかっているはずなのに、線引きされている。これは、なぜなのか。湯浅さんによるとそれは、人々の間で問題が共有されていないからだそうだ。公的な政策と呼ばれるものは国民全員の税金によって進められている。その公的政策がどんな社会問題に対応しているのか、その社会問題を知らなければ、公的政策も理解できない。よって、政策範囲が狭まり、線引きが生まれてしまう。ここから言える重要なことは、問題意識を社会に生きる人たちに浸透させ、当事者の声を発する場をもっと設け、政策範囲を広げていくことなのだという。私はこれを聞いたときに、最近もやもやしていたことが少し消えてなくなった。「日本には社会福祉政策に対して、社会福祉に対して理想とされる考えを持った人がいるのに、どうしてまだまだ政策に反映されなかったり、問題が山積したりしているのだろうか」とずっと疑問に思っていた。しかし、湯浅さんのお話を聞き、現場で直接クライアントと向き合う人、国で政策をつくる人、それに関わる人、この人々と一緒に、社会に訴えかけ理解を広げる人の存在が必要だということがわかった。また、それを「民意」として政策に反映させることも重要なのではないだろうか。この気づきが、今回の大阪調査の一番の収穫になった。

そしてまた、自分が報道を通して社会に訴えかける存在になりたいという思いも一層強まったように感じる。

大阪調旅行 振り返りレポート

総合社会システム専攻2年 猪岡友紀

今回の調査旅行で、ひきこもりについての「居場所」という側面から考える交流会に参加して感じたことは、居場所というのはそれぞれ個人特有のあいまいさを持つものであり、トレーニング訓練をする場ではなかったものが、支援機関が行う上では目標などがつくられてしまうために、就労や制度的、強制的なものになってしまう場合もあるということである。「居場所」という社会的に定義されているものがないものに対して、「居場所」とはどのようなものか。そして次のステップとして社会参加に結び付く「居場所」とはどのようなものなのかということについて考える交流会であった。なかでも就労というものが深く関係しており、フリースペースなどの狭い意味での居場所から、就労訓練の場での居場所、そして社会参加としての仕事場など、ここからここまで区切りをつけて次のステップへと押し出すのではなく、それら一連が重なり合っているという考えのもと、その人の「居場所」を支援することが求められるのだと思った。しかしながら、支援を行う上では、福祉や教育、労働などが関係しており、まさに他分野がどのように協働していくかということが重要であると思った。この協働ということに考える上で私が今回の調査旅行で最も印象的であったのが、第9回社会的ひきこもり支援者全国実践交流会での湯浅さんのシンポジウムであった。このシンポジウムの前の講演でも、ひきこもりをはじめとする若者支援について、単に就職させることではなく、将来の長期的な失業を防ぐことや、生活困窮に陥るリスクを抱えながらも、そもそも生活困窮にみなされなかったり、制度に入ることができないグレーゾーンの若者がいるという制度の抜け目から落ちてしまう就労困難な若者が増加しているということが挙げられた。そのためには福祉や教育、医療などとのつながりが必要であるとされつつ、どうしてつながっていかないのか、構造の理解に終わるのではなくてはならないとされた。しかしながらこのつながり、すなわち協働をおこなうためにはどのようなものであるべきなのか、という私の疑問に対して、とても印象的だった湯浅さんの話では、例えばネットカフェ難民はホームレスではないなどの区別、線引きがおこなわれている。これは自分たちの中で差別はよくないものだとしていきながらも差別化を行っているということであった。そしてそのような線引きがおこっているのは、私たち自身、また福祉に関わる人と世の中の温度差がもたらすものであるということであった。このことは「協働」ということに関して考えるときにとても重要な考えであると思った。問題意識や必要性を共有することでできることが増え、政策は広がる。そのために理解を広めていくためにできることは、その問題や問題意識そして必要性について知らない人に、一方的に理解を押し付けるのではなく、まずはしっかりと話をきくことが必要であるということ。賛同者のみの私的な活動を超えて、公的な活動を行うためには、そのような「いいな」と感じていない、思っていない人への理解を進め、私たち自身と世の中との温度差をなくしていくことが求められるということであった。問題意識や必要性をあまり感じていない人や「いいな」と思っていない人、すなわち世の中との温度差をなくすことではその人自身の考え方、意見をも

っており、またそのような温度差を自らつくりだしていると感じていない人もいると思うので難しさも含んでいるけれど、制度をはじめとする構造上の問題にとどまるのではなく、そのような人々の認識、どのように理解を広げるかということを考える必要性を感じた。このことが他職種、他分野での協働を考えるうえでのもととなるひとつの考え方であると思う。今回この調査旅行でも他専攻の人をはじめ、福祉に関わる人関わろうとしている人、そして実際に関わっている人の話をきくことができたのは、協働を考えるうえでの第一歩となった気がした。今後もっとそのような人との意見を交換できたらよいと思った。

大阪調査旅行

総合社会システム専攻3年 藤井彩加

<み・らいずについて>

み・らいずの活動は、当事者や福祉従事者だけでなく多くの人にとってこれまでの福祉の印象を変えるものであると思う。

生活の中には制度によって保障されるサービスだけでは補えないニーズがある。そうした制度の穴にあるニーズを利用者や家族の関わる困り感で終わらせるのではなく、制度に縛られない新しいサービスを作り出していくという柔軟性を持っていることが、み・らいずの特徴であり、魅力である。「LIVELOCAL?」というスローガンに当事者の暮らしを包括的に支えていくという姿勢や気持ちがすべて込められているように思う。新しくサービスを作り出して実現することや地域の暮らしを支えていくことを可能にしているのは近隣の大学生によるボランティアである。いま地域にある資源を活かしていくことが地域での暮らしを可能にしていく。そして、この学生ボランティアが200人にもものぼるとするのが驚きである。大学の多い場所へ事業所を設置するといった工夫がされているが、それだけでは人は集わないだろう。ただでさえ、福祉は3K(汚い・きつい・危険)というイメージが根強く、その分野に関心のある者以外には敬遠されがちである。それをみ・らいずはものともしないように、学生が集まってきている。どうしてそうしたことが実現されるのか尋ねると、「自分たちが楽しんでいると、それが漏れ伝わっていく。人は楽しいことが好きだから、楽しさが伝われば人は集まる。」と答えてくださった。み・らいずの展開する様々な事業に携わる方と話をさせていただいたが、どの方も生き生きと話をしてくださり、当事者への支援を真摯に考えながらも楽しんでいる様子が伺えた。少しの時間でも感じられるほど魅力あふれる人ばかりであり、これがたくさんの学生を惹きつけつるのだと感じた。

もう一つ、み・らいずの特徴であると感じたのが「自分たちで出来ないことは出来る人をお願いする」という姿勢である。制度によるサービスを実施するうえでも、新しいサービスを作り出す上でも、自分たちだけではできないことが出てきたとき、既にあるものとむすびつけることで実現している。障がい者就労移行支援事業では、障がい者のための働く場所を作り出すことは、場所の確保や資金、限られた雇用人数などの理由から実現が難しい。だが、飲食店の多い大阪で作業がマニュアル化されたチェーン店という特徴を活かして、就労移行支援を実現している。新しいものを作り出そうとしていく創造性や行動力だけでなく、あるものを活かすという柔軟な発想もみ・らいずの特徴であると思う。

み・らいずの活動は、人対人の中で生じる気持ちや行動が原点にあり、それを事業として展開

していけるようにしているものであり、一つ一つの関わりは特別なことではなく当たり前のことなのかもしれない。だが、そのひとつの行動を起こすことや事業にしていくことは簡単なことではなく、それを可能としていくみ・らいずはこれまでの福祉を大きく変え、今後も福祉のあり方を進化させていく存在のように感じた。

<社会起業家コンペについて>

社会起業家のコンペを聞いて印象に残っているのが、NPO カタリバの今村さんがおっしゃっていた「ナナメの関係」である。親や教師がタテの関係、友人や恋人がヨコの関係としたとき、少し年上の先輩との関係をナナメの関係と呼んでいた。高校生と大学生の交流の場を設けて、進路や人生の選択を迫られる高校生に対して、同じような時代背景の中で同じように選択をしてきた少し上の先輩として大学生が熱く想いを語っていた。タテの関係である親や教師といった大人からの言葉というのは指導じみたものがあり、強制されているようで受け入れがたいことがある。だからといってヨコの関係である友人と話せるかということ、比較の対象となりすべてを話すことは難しいことがある。しかし、ナナメの関係である大学生ならば、指導じみた強制ではなく経験に基づくアドバイスとして聞くことができ、比較の対象ではなくあくまでひとつのロールとなる。このお話を聞くことで、ナナメの繋がりが大変意味のあるものであることを感じた。そして、今村さんがこの繋がりを社会資源と呼び、重要とされることの意味を考えさせられたのが「名前のない問題」「問題化されない問題」を最近の若者が抱えているという話である。

この問題化されない問題は、「単なる若い子の無気力」とされ、自己責任とされてしまう。だが、その影には、未来が思い描けない、描き方が分からない、未来どころでなく今の自分が好きになれない、友人との付き合い方が分からない、そうした思いがあり、こうした想いを抱えている若者が多くいるのである。この若者が次世代を担っていくことを考えると、解決の道が見えず、混沌とした思いを抱えて過ごしているいま、サポートが必要なのだと思う。そして、その支援に一役買う社会資源がナナメの関係となる。だが、こうしたナナメの関係は自然と生まれるものではなく、交流の場を作り出すことが必要である。この仲介の働きが事業として求められるものだと思う。

大阪視察ふりかえりレポート

総合社会システム専攻3年 箕輪真菜美

<み・らいずについて>

み・らいずの活動は福祉のイメージを明るくもの・身近なものに変えるものだと感じた。

法で定められた公的なサービスだけでは当事者の生活を包括的に支えることはできない。できない部分は当事者に不便を強いるのではなく「なければ作ればいい」と、新たなサービスを作り出し、提供しているのがみ・らいずである。したがって、法改正等により当事者たちの生活が大きく変わった際も法の穴を埋める形での事業展開がされた。み・らいずの新規事業は、常に利用者の小さな声に基づいて展開されてきた。利用者のニーズに沿ったサービスにより、利用者の支持を持続的に集めることが可能となっている。

利用者のニーズに応える形での事業展開は幅広いが、それを可能にしているのは大学生のアル

バイト・ボランティアの力である。私としてはなぜ 200 名近い大学生、しかも特に福祉に関係のない学生も含めた協力が得られるのか不思議だった。大学生が福祉に関わろうとすると介護分野 = 3K (きつい・汚い・危険) のイメージが強く、関心のない人では動機さえ抱きにくい分野のように思うからだ。しかし、み・らいずでは、そもそも大学生を主体とすることを大前提にしており学生の活動しやすい場所に拠点を置くなどの配慮をしている。また、関西ではほとんどの学生が何らかのボランティアをしているという地域性も関係しているのかもしれない。そして、学生がみ・らいずに魅力を抱く最大のポイントは社員の皆さんが魅力的で、楽しそうに仕事をしていることではないかと思う。私自身、み・らいずの方々とお会いしお話を聴く中で、柔軟な発想や行動力に驚いた。また、み・らいず理事長の河内さんは「学生は楽しいことが好きだから、楽しさが伝われば集まるはず。楽しいことを伝えるには、自分たちが楽しめばいい」と話してくださった。

ふりかえってみると、み・らいずは特別なことをしているのではなく、「必要なはずなのにないものを作る」「楽しむ」というシンプルな考え方に基づいているだけなのかもしれない。しかしこのような考えが、とっつきにくい風潮の現在の福祉には必要なのだと考えられる。

<社会企業家コンペについて>

イノベーションとアダプテーションという言葉が印象に残っている。イノベーションは「社会そのものを変えていくこと」、アダプテーションは「今ある問題に適応させていくこと」である。大学の講義では、法制度や公的なサービスの仕組み施設の役割等を学び、クライアントのニーズに対しサービスをどのように組み合わせるかを考えるという、アダプテーションの学びが多かったように思う。もちろん、この学びは専門職のもつべき知識として、支援体制を構築する上で必要なものである。しかし、前述したように公的なサービスでは支えきれない生活の実態が障害者や高齢者など、支援を必要とする人々には存在する。ここで、アダプテーションを公的なサービスとすると、イノベーションは法の隙間を埋めるサービスと言い換えることが可能だと思う。したがって、イノベーションはアダプテーションの先にあるものなのではないか考えられた。み・らいずや社会企業家の活動と思想が私にとって新鮮なものに感じたのは、それらがイノベーションであり、アダプテーションに留まっていた私の学びの先に存在するものだったからである。

もうひとつ印象に残っている言葉として「ナナメの関係」がある。これは NPO カタリバの今村さんがおっしゃっていた言葉で、上下でも横でもない、高校生と大学生のような関係つまり、少しだけ年上（年下）の先輩（後輩）の関係である。このナナメの関係は社会資源の一つであると述べていた。また、兵庫県立大学の COC 事業では大学生が地域活性化の中心を担うことから分かるように、大学生と地域住民とのナナメの関係も存在する。大学生は社会に出る直前の段階で社会にとっては若くフレッシュな存在であり、中高生にとっては憧れの存在でもある。また、大学生は社会経験が浅いからこそ上の世代からの教えを受容することができ、自分の価値観に基づく考えを発信することができ、年齢の近い子どもたちの目線に立つこともできる。大学生は上の世代にとっても下の世代にとっても影響を与え、反対に彼らを受容できることから、社会のパイプ役に適しているように思う。そこで、課題なのは大学生たちをどのように地域社会の中心に置くかであると考えられる。そのために、社会における「誰かの」課題を「自分たちの」課題に

捉えなおすことが第一歩である。自分自身が課題に直面してしまえば話が早い。したがって、とりあえず地域に出てみたり、み・らいずのような活動に参加したりというのが近道であると思う。つまり、大学生たちが課題に直面するまでは、意図的な出会いの提供が必要である。それは大学の取り組みだけでなく、社会企業家や社会福祉法人やNPO 団体等が担うべき役割だと考える。

大阪調査旅行調査レポート

生涯学習専攻 3年 木村奈津子

<はじめに>

本レポートの目的は、HATO プロジェクトの一環である大阪調査旅行で学んだことや考えたことを整理することである。これによって、この調査旅行をただ「行った」、「知った」で終わらせるのではなく、自分自身の知識、経験へと変化させることができると考える。基本的な知識がないために、どちらかという今後の事を考えるまで及ばず、現状を把握することに注力した調査旅行であったが、自分の中に、福祉を捉える新しい視点が生まれた気がしている。重複するが、その新しい視点を少しでも明確にすることが、本レポートの狙いである。

<1日目>

・虐待について…

み・らいずさんでは、被介護者への虐待に関する事業(この表現が適切かどうかはわからないが、これを用いる。)を展開している。もともと、虐待についての新事業を展開しようと思って始めたのではなく、障害者への介護等を行っている中で、自然と被介護者に対する虐待を扱うことが増え、そういった事業(?)が発展していったということだった。虐待は、介護ストレスや親子で障害を持っていることが原因となっているケースが多いということだった。介護ストレスは、始終介護しなくてはならない状況が続くことで生じるため、別々に暮らすという選択をすることで対応しているというお話だった。子ども(被介護者)を受け入れてくれる施設を見つけるまでにショートステイや、ショート入所を繰り返すこともあるが、虐待を防いだり、被害を大きくしないためには必要なことだということだった。

→今まで、虐待というと児童虐待のイメージを持っていたため、介護ストレス等による虐待のリアルなお話をきき、衝撃を受けるとともに、被介護者が本当に弱い立場に立たされていると思った。介護放棄を受けた時点で死に直結することもあるということにこの問題の深刻さを感じた。もちろん、児童虐待でも自体は同じだが、ある程度の年齢に達した場合、自力で死を回避することが可能であるのに対し、被介護者と介護者間の虐待は、被介護者がいくつになっても続くことであるということに改めて気づいた。さらに、だからこそ、み・らいずさんのように、周囲の人間が支えていくサポート体制が必要不可欠なのだと感じた。

<2日目(ひきこもりフォーラム→④居場所の課題と発展)>

・居場所の定義：80年代当初、不登校課題の学校外の運動から使われ始めた「居場所」は、年を追うごとにその意味合いと対象を拡大し、様々なシーンで使われるようになった。もともと「学

校外・制度外」で語られてきた「居場所」が、昨今「施策として・制度として」も語られるようになってきており、当事者の「居場所感覚」と無関係に、就労といった特定の目的の「手段的に」用いられることへの危惧も語られている。本実践交流会は、現場の報告等をもとに再度「居場所」を見つめなおし、問い直した。

→NPO 法人淡路プラッツは、「居場所＝しんどい人がゆっくりできる場所、エネルギーをためる場所」と定義づけたうえで、居場所の関わりとして「居場所に居続けることが目的ではなく、居場所は“社会参加→自立・就労する”ための手段」を明確にしていた。故に、就労のタイミングをスタッフが見極め、泊まりのイベントを催す等を通して、アプローチをかけるとのことだった。一方でNPO 法人文化学習協同ネットワークは「社会(地域)の中に“居場所”を押し広げる」といった手法で「居場所づくり」「就労サポート」を行っていた。具体的には、商店街での活動を通して自然と顔見知りを増やしていき、自分の心が安らぐ範囲を拡大していく方法だ。また、就労に関しても、中小企業等への協力要請に力をいれ、様々な職種を選択できるように整えていた。

私は、文化学習協同ネットワークのように、居場所が広がっていくような形でサポートすることに共感した。と同時にこれを可能にしているのは、中小企業の社長さんたちのネットワークがあることと、東京自体に会社が多いことなどといった環境的要因が大きいとも感じた。その地域にあった就労アプローチをしていく必要があることが分かったが、総じて、「はたらきたい」という意欲を持たせることが重要なのだと感じた。

<3日目(ひきこもり特別シンポジウム)>

→ひきこもり支援を、私的に行うのと政府が税金を使って政策として行う場合は全く異なる。私的に行う場合は、活動に対し否定的な人がいたとしても、それを無視することが許される。しかし、政策として行う場合は、活動に否定的な立場を主張し、税金を払わない行動に出た場合、強制して納税をせまったり、土地等の財産を差し押さえたりする権限を持っている。それだけ、政策で行う場合の強制力があるということに、国が事業に関わる意義をかんじた。そして、一番重要だと感じたのが、強制力を行使するのではなく、話し合いで関係を作り出すことである。「ひきこもり支援の必要性がわからない方がおかしい」というスタンスで交渉にあたるのではなく、その考え方を受容した上で、意見を交えること、反対意見を持つ人のお金があるからこそ成り立っている事実を忘れないことの重要性を再認識した。

<まとめ>

私は、この調査旅行を通し、基本的な福祉の知識がないだけでなく、福祉のもつ複雑な問題に対して向き合う覚悟やパワーがなかったことに気が付いた。実際に現場で働いている方のお話を聞いたり、きちんとそれらに問題意識をもって学んでいる仲間と接したりする中で、自分の立場を再確認した。現実困っている人がいる問題を、そうでない立場の人間が語る時、中途半端な知識や気持ちで語るほど、空虚なものはないと考える。故に、今回の調査旅行で学んだことは勿論、知りたいと感じたことについて、しっかりと学び、きちんと問題に向き合おうと思った。そして、机上で得られる知識だけでなく、積極的に動き、現場の声を聴く努力をしていきたいと

感じた。

HATO プロジェクト大阪視察－“働く”ということ－

総合社会システム専攻 2年 柳内優佳

私は3日間の大阪視察を通して福祉の現場に対する考え方や福祉への関わり方などが大きく変化した。特に“働く”ということについて深く考えさせられた。障がいを持つ人とそうではない私にとって“働く”ことは一体どういうことであるのか述べていきたい。

まず、障害を持つ人にとって“働く”とは一体どういうことであるのだろうか、考えていきたいと思う。1日目にみ・らいずのセントラルキッチン「EMI フーズ」を見学させていただいた。私はそこで障がいをもつ人が実際に働いている姿を初めて目にした。私は、あまりに自然な彼らの姿に驚いてしまった。職員の方が手取り足取り補助・指導を行っているものだと思い込んでいたので、私たちが作業する姿と何も変わらないことに衝撃を受けてしまった。まずは自分でやってみる。そしてできないことは助けてもらう、教えてもらうということをお願いしているということを知った。これは、自立生活訓練ホーム「みらい館」を見学させていただいたときにも聞いた話だ。自分の力ではできないが誰かの手を借りればできることを増やしていく、それが自立へとつながるそうだ。これは授業でも学んだことである。その時はあまりピンとはこなかったが、2つの施設を見学してようやく理解できた。障がいを持たない私たちでも、互いに協力し合いながら生活している。無理して何でもかんでも自力でやろうとすると失敗することはよくある。「できないからちょっと手伝って」こうした一声で仕事が楽になったり、より効率が良くなったりする。私たちが当たり前のように誰かに頼っている。そうした頼り、頼られるといった関係を築くことが社会的かつ人間的であり、自然なことであるのだろう。私たちと同様に、そうした社会性を身に付けるためにも、人と接点をもつ“働く”という機会は、自立に向けて非常に重要な要素であると考えた。それを受けて、もう1点考えたことがある。障がい者の働く場所についてである。近年、障がい者は表に出ることだけに目を向けられてきたというお話を聞いた。世の中の仕事はバックヤードのものが多く、もう一度バックヤードの仕事にやりがいを持たせようとして、み・らいずでは大手チェーン店の「鳥貴族」と連携しているそうだ。障がいを持つ人は個人の得意分野を活かした仕事ができ、連携店にも都合がいいこのシステムは、両者のニーズを満たす画期的なものだと感じた。しかし、この事実を知っている人はどのくらいいるのだろうか。あんなに生き生きと責任をもって仕事をしている彼らの姿を知らない人は多いのではないだろうか。もっと一般社会に理解を広めていくためにも、彼らの様子を表にあらわにする必要性も感じた。2日目に見学した「ソーシャルビジネスプラン edge 2014 ファイナルコンペ」で「アウトサイダー層（エートゥル・プレッシュ層）の働く場の拡充」と題し、障がい者やひきこもりに人々にカフェ経営などを行うことで、働く場を与えるというビジネスプランの発表があった。社会に出ることに困難を抱える人々に社会との接点を与えることは、福祉の重要な役割のひとつであるだろう。しかし疑問に感じることもあった。例えば、障がい者が経営するカフェとチェーン店のカフェが同じ地区内にあったとする。そんなとき多くの人々はきっとチェーン店のカフェに入るのではないだろうか。私自身、気軽に入れるチェーン店の方を選んでしまうだろう。広く知ってもらおう

として“障がい”を全面に出すことが、逆に壁をつくってしまうのではないか。前者のカフェを選ぶのは、福祉関係者や当事者たちといった関心がある人々であるのではないだろうか。結局は客層が広がらず、小さいコミュニティに止まってしまう。一般化には逆効果になってしまう可能性があると考えた。私は、後者のカフェの店員に障がい者が一員として働いている方が、変な壁などを感じにくくなるはずである。それが世の中に広く浸透していけば、障がいを持つ人が地域の中に存在するのが当たり前という社会になる。私たちがよく利用する場や身近な場所で障がい者が、私たちが就職し仕事をするのと同じように雇用され“働く”ことができれば、ノーマライゼーションに近づくのではないかと考えた。

そして、私にとって“働く”ということはどういうことであるのだろうか、考えていきたい。私にとって働くことは辛い、嫌なものというイメージが強かった。お金のため、生活のため、家族のための“労働”に近いイメージであった。世論を耳にしていると、どうしてもそのような印象を抱いてしまう。一方で、障がい者に仕事を提供するとなると、“やりがい”や“自分らしさ”という言葉がセットで付いてくる。それは、彼らにハンデがあるからという理由や、より大変な思いをさせたらかわいそうという同情から、彼らの支援には自分らしさが重視されるのだと、心のどこかで感じしまっていた。しかし、み・らいずのスタッフの方や、edgeに参加されていた社会企業家の方々のお話を伺っているうちに、自分の好きなように、自分らしく、楽しく“働く”ことが普通のことであるのだということに気が付いた。特に福祉の勉強を始めてから、3Kと言われる福祉の現場で働くことに懸念と疑問を感じていた。福祉＝奉仕という考えが頭の中にあった私には、福祉でビジネスをすることに対し抵抗があり、そうしたビジネスの中で働く人々はどうな思っているのだろうかという疑問を感じていた。edgeの講演の中で、ビジネスには営利を求めると、持続可能性を求めるとの二つがあるとおっしゃっていた。福祉の場合は後者である。その福祉サービスを必要とする人がいる限り、その支援を持続させるために利益を生み出す必要があるのだ。そして、福祉の現場で働く人々の生の声を聴いて自分の視野がいかに狭かったかに気が付いた。誰もが“働く”ことで自己実現をしようとしている。それは自己満足であるかもしれないが、自分の成長を感じたとき、相手の成長が見られたとき、事態が良い方向に変化したとき、やりがいを感じるのだという。福祉の仕事は必ずしも「誰かのため」である必要はない。自分のために“働く”ことで、仕事に熱を入れたり、よりよい支援をしようと努力したりする。それが社会に質の高い社会資源となって還元されるのだという。今回、現場の声を聴いて、私の想像していた現実との差に非常に驚いた。“働く”ことは、自分らしく生きるため、自己実現をするために重要な役割を担っている。これは、どこかで何度も耳にしてきたことである。一見、当たり前のことのように聞こえるが、私はこの3日間でこの言葉の本当の意味を知ることができた。

自立や自己実現、自分らしさといった言葉は、“働く”を語る上で何度も何度も目にしてきた言葉である。しかし、現代社会の中で自分以外の何かのために働くことに重点が置かれるようになり、自分自身のことは二の次になってしまう傾向にある。誰かのために“働く”ことは決して悪いことではないと思う。しかし、自分らしく生き生きと生きていくために、自分のやりたいことを思いっきりやりたいと思った。そのために自分らしさや自分の課題を見つけていきたいと福祉の現場を見て強く思った。

社会福祉法人愛隣園／熊本
個人別視察レポート集

熊本の調査旅行に行って一番考えさせられたことは福祉（もしくは教育）の専門性についてである。実習に二日間入らせていただいて、利用者の方とおしゃべりをしたり五目並べをしたりして、私はただ楽しませていただいた。そこに「専門性」はあまり関係なかったように感じた。「障害者」とか「高齢者」といったラベリングとは関係ないもっと深いところで、私と利用者さんはコミュニケーションした。むしろ、コミュニケーションはそういった一対一の関係にしか究極的にはありえないことを改めて実感した。実習と言っても二日間もなかったのも、あまり重い仕事を職員さんがこちらにまわさないように配慮してくださったのだろう。しかし、その職員さんに話を聞いたところ、大学で福祉の勉強をしたというわけではなく、また、もともと福祉の分野に興味はなかったという方も多かった。

このことを福祉にかかわりの深い特別支援教育の分野を専門にして大学で勉強する私はどのようにとらえるべきなのであろうか。施設長は私の質問を受けて、「きちんと評価ができる研究（専門）の力も大切」であると語ってくださった。しかし、その評価とはおそらく対外的に自分たちのやっていることの価値を認めてもらうために行うものである。しかしその専門性が、施設の中にいる利用者さんとの一対一のコミュニケーションにおいて役に立つことはあるのだろうか。もちろん、きちんと対外的（＝客観的）に評価できるシステムがあって初めて施設は機能するのかもしれない。車いすや機械浴槽を扱うための知識を持つこと無しに、この施設で働くことはできないであろう。

一つ言えることは、この施設で働くために必要な専門性は大学で4年間かけて学ぶほどの膨大な量のものではなく、必要最低限で良いということだ。さらにもう一つ言える大切なことは、大学で学ぶ専門性以外に大切なことがたくさんあるということである。施設長さんの最終日の言葉は印象的であった。

「あなたたちはこの場所の方針を一日で感じ取ってくれた。なぜ障害者支援施設を希望したか、という初心をずっと大切にしてほしい。心に感じたことを大切に、自分を完璧に信じる。緩やかで安全にするためにはかなりの努力をしている。精神的な理念とチームワークがこのような施設においては大切である。集団生活という言葉を使わず、集団が個人をつぶさないこと。人間はいかようにも変わることができるので、人間を測らずに信じること」

この中には大学で学びを深めれば気付くことができそうなものもあるし、施設長さんの人格が言わせたものもあると思う。しかしここで私が言いたいことは、最低限の知識を身に付けてさらに大切なことを知るためには、大学に行かずに施設で働いたほうが早いのもかもしれないということである。“人”を相手に実際の場で働くことになった時に、大学で学んだことをどう生かしているのか、もしくは生かせるような学びをどう大学でしていくのか。このことは大学に在学する残りの一年間、継続して考えていきたい。

2014 年 2 月 27 日～3 月 1 日の 2 泊 3 日で熊本県山鹿市にある「愛隣館」という社会福祉施設にお邪魔した。私は、そこでデイケアを中心に実習をさせていただいた。デイケアでの実習は 2 日目に行われ、一日施設について学びながら、スタッフの補助、利用者との交流や利用者の方の送迎などをして過ごした。

愛隣館のデイケアサービスの利用者の方々は要介護度が比較的 low、失明していたり下半身麻痺などの障がいを負っていても自立して生活できる方が多かった。また、口による会話を通してのコミュニケーションができる方がほとんどであった。私は利用者の方々と交流するに当たり「楽しい時間を一緒に過ごす」をモットーにしていたが、その一方で「身体にハンデを負っていて、生きることに辛さを感じているのではないか」といった点を心に置きつつ交流をしていた。この一日でたくさんの方と様々な話をさせていただいた。その交流を通して感じたのが、私が気にかけていた「身体にハンデを負っていて、生きることに辛さを感じているのではないか」ということをどなたも感じていない、あるいは気にしていないということである。もちろん、利用者の方全員が身体に障がいを負っているわけではない。しかし、利用者の中には障がいを負いながらもデイケアで楽しく過ごされている方もいる。そのような方々は自分の障がいについて、「その障がいを負っているのは当たり前、いわば日常」と思っている方が多いと感じた。自分の持っている障がいを受け入れて、その状態が当たり前となっている自分に今、何ができるか、どのようにすれば楽しくできるかを日々考えながら過ごしていたらそれが当たり前になり、障がいを持っていることが辛いといった風に考えることがなくなると思われる。慣れというものがあるだろうが、そう簡単に自分の抱えている障がいに慣れることは出来ないと私は考える。

そのように、利用者の方々が日々楽しく過ごすことができる環境を提供されている「愛隣館」のスタッフの方々は相当な苦勞と努力があると私は実感した。人を相手にするサービスは肉体的にも精神的にも疲れやすいものだ。しかし、ここのスタッフの方々は皆さんいつも笑顔でしっかり利用者の方々の様子を見ながらお仕事をされている。私が思ったのはスタッフの皆さんが利用者の方との会話やゲーム、お世話を楽しみながらお仕事をされていると感じた。これはとても素晴らしいことだと思う。というのも、スタッフが不安やイライラ、ストレスなどを抱えてしまうと表情や行動に出てしまいがちである。人を相手にするサービスであることや自分たちも人間であることから仕方ないことではあるが、そういったことがないのがすごく素敵だと思い、私自身そうなりたいと目指す目標の一つになった。また、これらのことが先ほども述べた利用者の方々が日々デイケアに来て楽しく明るく過ごすことのできる一つの要因であると思った。

最後に、利用者の方々と交流を通して感じたのは、皆さん共通して山鹿について楽しそうに、嬉しそうにお話をしてくださることである。そこから皆さんが故郷である山鹿への郷土愛や地元愛のようなものを強く感じる事ができた。東京からやってきて山鹿について何もわからない自分に対して熱く語ってくださって私も嬉しかったし、何より山鹿について一番わかりやすい説明をしてくださった。そこに長年住んでいる方々の生の声というのはどんな説明よりも分かりやすいものだと感じた。そのように故郷である山鹿を皆さんが笑顔で語ってくださったのは山鹿に誇

りを持っているからなのかと私は思う。非常に素敵な土地で素敵な利用者の方々と交流でき、様々な角度から人と接することについても有意義に学ぶことが出来た。

つなプロ調査旅行 熊本

総合社会システム3年 江藤瑞希

<全体の振り返り>

今回訪問させて頂いた愛隣館で一番印象に残っているのは、入所している利用者でありながら、相談員やピアカウンセリング、日中活動のトレーナーをされている、職員の一面を持った方が多かったことです。今まで私は、職員は職員、利用者は利用者とくっきり線が引かれている施設ばかりを見てきました。しかし、わたしたち健常者も学生という立場を持ちながら、一方でアルバイトとして働いていたりなど、多くの役を持って生活し、そのようにして社会は成り立っているように思います。だからこそ愛隣館はあまり「施設」という印象を受けない、ひとつのまちのよう感じたのだと思います。また、これはみんなの話し合いの中でよく出てきたことでもあるのですが、愛隣館はとてものどかな雰囲気のある場所だと思いました。まわりに自然が多く、立地面からしてそう感じたということもあると思いますが、職員の方が時間をくっきり決めずに利用者さんの意見を尊重しているからだと思います。しかし、これは言葉にすると簡単ですが、時間を決めないと食事や薬を飲む時間、体力などに様々な問題が生じる可能性があります。今回は3日間の訪問ということで愛隣館の良いところしか見えなかったように思いますが、そのようなリスクマネジメントにはとても気を遣われているのだと思います。また、地域との関わりが強い施設だと思いました。歴史が長いからなのか、その地域に施設がとてもとけ込んでいるように思いました。

<他専攻との関わりの中で>

今回の訪問では身体介護や利用者さんと直接関わる機会が多かったように思います。そこで見えたことは、やはり専攻によって現場慣れしているかしていないかの差が大きかったように思います。もちろん、個人的にそういった経験を積んでおり、専攻は関係ない部分もありますが、福祉専攻や特別支援の学生はすぐにそういった介護にすぐになじめていました。しかし、それらに慣れていない専攻の人はとまどっている場面も多かったです。教育実習の一環として行われている介護実習もありますが、利用者さんとひたすら話すだけであまり有意義な時間ではないと実際に実習に行ったことのある友人から聞いたことがあります。どうせならもっと実のある時間にすれば良いのと思います。介護実習という機会を大事にして、学校だけではなく、地域に目を向ける良い機会にするためにはもっと工夫が必要ではないかと思いました。また、職員さんに「養護教諭にできることは何ですか？」と自分の専攻に絡めて質問する人が多かったように思います。私は、まず養護教諭専攻の人が日頃どういった勉強をしているのかぼんやりとしか分かりません。しかし、わからないのに連携などまず出来ないと思います。授業プログラムの中で、他の専攻が一体何をしているのかを学習するために、他専攻が参加する問題解決型の授業プログラムなどあれば、どこでどういった時にどの人に頼ればいいのかを具体的に学習できるのではないかと思います。

今回の視察では児童、障害、高齢等障害にわたるさまざまな支援をおこなっている社会福祉法人愛隣園の見学とデイケア(高齢者)での実習をさせていただいた。

愛隣園の各施設では利用者やスタッフの食事を外注するのではなく各施設で準備をしていると伺った。また利用者のかたも施設に関係することやその他のことなど各自の役割をもっているように感じた。スタッフか利用者かに関わらず互いに支えあっている様子がみられた。入所施設に限らずデイケアであろうとそれぞれの施設は利用者にとって生活の一部であり、受け身ではなく自分たちでつくっていくという様子を感じた。入所施設であれば利用者にとってそこは家であり、家をつくったものを一緒に食べ、互いに誰かのために仕事をする、役に立つというのは当たり前のことである。しかし、その当たり前を行うことが今の福祉の現場では難しいことが多い。愛隣園はその当たり前を実践していると感じた。この当たり前を実践するためには「あきらめない」「ことわらない」「丁寧な個別支援」の三つの理念が重要だと感じた。利用者の声をしっかりと聞き、要望や希望などの声に対し、どうすればその声にこたえられるかを考える。このことは実際に行うことは難しく、「あきらめない」こと、「ことわらない」ことがしっかりと実践にしみついているからこそできると感じた。またそれらのことを具体化するために丁寧に個別の状況を鑑み、支援を考えることが重要だと思う。

「あきらめない」ことが、利用者の当たり前の生活を作っていくために重要だと考えるが、日ごろから自分ができること、できないことを考え行動しているとどうしても、「それは難しいのでは」という発想が浮かんでくる。このときに多様な専門性をもった人たちに意見が重要になると感じる。自分一人ではどうしても自分の専門性からみた見方になってしまい、他の視点を忘れがちになる。ひとりでは多様な見方をもつことが難しいが、多様な専門性をもった人たちと協力することで、全体として多様な見方をもつことができる。そうすることで自分の見方からだけだとあきらめてしまいそうなことでも「あきらめない」ことを貫くことができると感じた。その時に異なる専門性をもった人たちが互いに専門性についてよく理解している必要は必ずしもないのではないかと感じた。今回の実習では社会福祉士の科目を取っていない学生や他の学年の学生がいて、このような施設を見学するのが初めてであった人もいた。そのような人の感想を聞くと見落としがちな純粋な疑問や意見がみられた。これは専門性を身につけたがゆえに見えなくなったことでもあると思う。そのため多様な専門性にかぎらずその分野の専門性がないことも大切になってくると感じた。

熊本調査旅行レポート

総合社会システム専攻2年 高橋麻友子

熊本県山鹿市にある障害者支援施設 愛隣館では、介護を必要とする方々にたいして必要な生活支援を行う施設です。

一日目は、主に施設の見学をさせていただきました。愛隣館のほかにも、児童養護施設 愛隣園

や、軽費老人ホーム 愛隣壮、特別養護老人ホーム 愛隣の家がある。職員の職種としては、介護職員、看護職員、機能回復訓練指導員、調理職員、生活指導員、介護支援専門員(ケアマネージャー)、施設長、副施設長、事務職員などである。

重度の身体障害を持つ方が通所する愛隣倶楽部では、ボール遊びをしており、利用者も職員も楽しそうに活動していた。重度の障害を持っていて、ほとんど自由に身体を動かせないのにも関わらず、ボール遊びをしていたことに驚いた。

愛隣館デイケアセンターでは、通所し、身体の介護や入浴、レクリエーション、昼食、機能訓練、などのサービスを実施。なかでも印象的だったのは、陶芸の工房があったことである。外部から陶芸の先生を呼んで、本格的に行っていた。盲目の利用者さんが作った作品も数多くあり、どれも目の見えない人が作ったとは思えないものばかりだった。陶芸を通して、施設内や地域のつながりを強く感じた。

児童養護施設愛隣園では、オレンジハウス、ホワイトハウス、彦岳ハウスの三ヶ所の見学をした。オレンジハウスには数人の女の子が生活しており、ホワイトハウスでは二組のきょうだいが生活していた。共通していたのは、すごくアットホームな雰囲気、家庭に代わる環境として機能していたことである。たとえば、キッチンの対面式にして家庭を再現するなどの工夫がなされていた。

地域小規模多機能児童養護施設である彦岳ハウスも、オレンジハウスやホワイトハウスと同様にアットホームな雰囲気づくりがなされていた。彦岳ハウスの見学中に、ある子どもが来たが、その子は施設で生活している子どもではなく、地域に暮らす子どもでした。

そうした地域とのつながりを持っていることは、子どもが孤独にならずに成長するためにもとても重要だと感じた。また、彦岳ハウスは愛隣館を利用する車いすの方でも入れるように段差が取り除かれていた。

施設長の三浦貴子さんのお話で、どんな人も断らないという施設の方針や、とりあえず何でもやってみるという自由な考え方が印象的だった。

二日目は、愛隣館で実習を行った。実際に初めて利用者さんの昼食介護をしたので、どうしたら食べやすいのか、なにが食べたいのかなど試行錯誤しながら行ったが、最終的に利用者さんとコミュニケーションをとりながら行うことでスムーズにできた。そこでは、利用者さん一人ひとりと向き合うことの大切さを感じた。

レクリエーションでは、風船バレーとぼっちゃというゲームを行った。風船バレーには、全員がボールに触らなければならないというルールがあり、どんな人でも参加することができ、その人の障害を理解するよいきっかけであると感じた。

また、利用者でありながら、資格をとり、相談員として活躍している方のお話を聞いた。利用者さんが相談員になるということは今まで考えたことがなかったのですが、障害者だからわかること、話せることがあるのかもしれないと気づいた。

三日目は、二日目に引き続き実習を行った。高齢で身体と耳が不自由な利用者さんと話をさせていただいた。筆談を交えながらの会話だったが、利用者さんからたくさんのお話を話していただき、熊本や山鹿のことが多く、ここでも地域とのつながりを感じた。しかし、その利用者さんは人と話すことが好きだと言っていたが、職員さんの数には限りがあり、今回のようにゆっくり

二時間話す機会はなかなかないのではないかと思った。

その後、車いすでフルマラソンを完走した方の映像を見た。フルマラソンを完走するまでには、本人の努力はもちろん、施設の方々の支援や家族や地域の方々の応援などがあつた。失敗しても、辛い練習を毎日こなしてフルマラソンを走つたその姿は障害をもつひとたちだけでなく、たくさんの方の勇気を与えた。利用者さんの夢と一緒に追いかけることができる環境は本当に素敵だなと感じた。

障害者施設なのにこんなにも明るい雰囲気、良い意味で施設らしさをあまり感じなかったことに驚いた。また、児童から高齢までさまざまなニーズに対応し、地域で包括的に支援していた。この愛隣館での視察を通して、生涯支援体制について、様々な視点から捉え、考えていきたい。

熊本ゼミ旅行 振り返り

養護教育専攻2年 高橋里沙

私は今回はじめて身体障害対象の施設、児童養護施設を見学した。またあまり福祉について知らない中で、養護教諭を目指す身として参加した。その中で見聞きしたこと、考えたことが以下である。

まずどの施設でも共通して感じたことが「家のような空間」である。児童養護施設「愛隣園」では、対面式のキッチンでいつも一緒に職員がご飯を作ってくれる、個別の空間がある、「ご近所付き合い」がある、といった点である。老人ホームでは、においが病院臭くない、作りたての食事、番地で部屋番号を表すといった点である。食事では、施設というと、多様で多くの人々が同じ建物で生活する。だから効率を重視し、手作りを目の前でということは難しいのではないかと思う。しかし、人間の生活の基本である食事が、家庭的であることによって、こころの健康にもよい影響を与えていると考える。また個人にあつた量・形状、食材、好き嫌い等を考慮した食事の提供もこのような食事環境によってよりよく実現されると考えた。個の空間があるということについては、集団生活で忘れられがちなことであると思う。効率を重視していくと、だんだん排除されることなのではないだろうか。しかしプライベートを確保することは、心身を落ち着けるためにも大切であると私は考えている。またにおいについてである。以前私が介護等体験を行った施設ではどこか病院のようなにおいがした。一方ここでは、「家のおい」がしていた。これは職員の方も気を付けていることの一つとおっしゃっていた。これについて、嗅覚は脳の中で感情を司る分野に最も近いと言われる。だからそれがより良いことでメンタルヘルスもよりよくできていると考えた。施設で生活するということは、少なからず心に負担があるであろう。これらは、それを減らす要因となると考える。

つぎに、「希望」「生きがい」を大切にしているということについてである。この施設でよく感じ、職員の方々もよくおっしゃっていた「利用者の希望に無理と言わないようにする」ということである。2・3日目に実習させていただいた愛隣館では、ふつうの障害者施設ではあまり許されないであろう多種多様な旅行やフルマラソン・プールといったスポーツ、飲酒喫煙などが認められ、利用者の希望はできる限りかなえられていた。これは、障害者支援や児童養護などにおいてとても大切なことであるが難しいことで、この施設の最大の特徴であると感じた。今回これを

実現するためのポイントは、利用者それぞれへの深い理解、最大限の工夫、責任者の考え方、地域の理解であると考えた。「理解」は、利用者の希望、思いをしっかりと知るためだけでなく、それをかなえるための方法を探るためにも大切なことである。「工夫」は、一見無理だと考えられることを、利用者の希望を最大限かなえるため必要とされる。「責任者」は前2点の実行も、責任者の考えと合わなければ成されない。愛隣館では館長がどのような希望も「やってみたら？責任は私がとる」と言ってくれることで実現していた。これは、館長自身が「利用者の希望を最大限かなえる」という信念を持っているからこそである。

すべてを通し、考えたことで、わたしが今回1番考えたことは「QOL」がとても大切にされているということである。現代では、QOLの向上がとても重要視されている。これは「すべての人間において」である。しかし、障害や親がいないといった特異的なことがあると、忘れられがちなことなのではないだろうか。QOLはその本人が自覚することであり、本人の意思に左右される。養護教諭、学校においては「子どもの成長発達」、障害者施設においては「障害を持つ人の生活」という特異性をもつ人を支援する。これらから共通して見えることとして、「人を支援する」職において、支援対象者のQOLを重要視していくことが大切であるということではないかとわたしは考えている。その為に、どちらでも個人の理解、連携体制の充実は大切である。

最後にこれからやっていきたいこととして考えたことである。まず私を含め教員志望者の福祉の知識力の低さである。必ず関わるはずである福祉についてわからないことが多く、これでは、将来子どもの健康な成長発達を支援する立場で、不十分であると感じた。これから勉強していきたいと考えている。また連携の大切さを改めて知ったうえで、異職種間での理解の大切さを感じた。学校の中の職員同士はもちろん教育職と福祉職間でも必要であると感じた。だからこのゼミでは教育のことを福祉も、福祉のことを教育も知り、考えられるような企画がなされるとよいと感じた。

つなプロ調査旅行@熊本 レポート

特別支援教育専攻3年 佐藤果菜美

<一日目>

「教育はがちがち、福祉はゆったり」という館長の言葉から愛隣館での実習は始まった。正直、ずっと教育について学んできた私にとってはショックを受ける一言だった。この3日間で、教育の何が館長にそう言わせ、それに対して福祉はどのようなかということを探っていきたいと思った。愛隣館の見学をして思ったのは、子どもからお年寄りまで生活に困っている人すべてを対象にして様々な仕組みで施設を運営しているのだなということだ。障害のあるなしやその程度も家庭環境の違いも差別せずすべてを受け入れている様子が見られた。オリオンテーションで館長が言っていた「断らない」精神が徹底されていた。

<二日目>

二日目からはグループに分かれて実習だった。私は愛隣館本館に配属された。看護課の方、栄養士さん、STの方など様々な立場にいる人から話を聞いた。人手が足りない中での仕事は大変だろうなと思っていたが、それよりもやりがいを強く感じている様子が印象的だった。館長さんが

「自由に何でもさせてくれる」ということが職員の方をいきいきさせているようだった。昼食時には初めて食事介護を担当。食事一つとってもすごく神経遣う仕事で、私は一人担当するのが精一杯だった。午後は入居者の方と風船バレーとぼっちゃをした。どちらも、障害の重さに関わらず全員が楽しめるルールになっているのを感じた。

二日目には、入居者でありながらピアカウンセラーや相談員の仕事をする方の話も聞いた。変に肩肘張ったやる気のようなものは見られず、自然に自分の役割としてこなしている様子だった。しかし裏では相当な努力をされていて、それを表に出さずにこなしているところがすごいと思った。

<三日目>

入居者の方とお絵描きをした後、車椅子フルマラソンを完走した方のビデオを見て、お話も聞いた。絶対にやりきってやるという気概に満ちた目が印象的で、人間はこんなにも強い存在感を放てるのかと思った。それには愛隣館の職員の方の諦めることを全く考えない精神が欠かさずあって、精神の揺るがなさに愛隣館の強さを感じた。

<まとめ>

つなプロのテーマである、大学生のうちから様々な立場の人が同じ体験をすることで将来現場に出た後に役立てるということについて私なりに考えた。

一つ思うのは普段教育だったり福祉だったりの枠の中で思考している私たちはどうしてもその枠にとらわれがちで、どんなに言われてもその枠を外すのはなかなか難しいということだ。今回、教育の立場の人が少なく私は少数派として参加した。だからこそ多数派の人たちの「枠」のようなものが見えたのだろう。最初に館長さんが言っていた「教育はがちがち」というのは、教科書や学習指導要領など体系だった決まり、つまり枠が多い教育のことを言っているのだろうと思った。しかし今の日本の教育では、個別の支援が大事といえども教員の数からしても完全に一対一対応のカリキュラムで教育することは不可能だ。一方、福祉はというと今回見ても思ったが教育ほど体系だった何かはない代わりに地域や職員によって支援に違いが出やすいともいえる。その良さを逆手にとった良い例が愛隣館なのだろうが、日本全国でそれを成し得るためにはやはりどこか教育じみた枠組も必要なだろう。

教育も福祉も、目指すところは支援を必要としている人たちのニーズに応えることに他ならない。やり方は違っても目的は同じもの同士、という認識で連携連携とがちがちに捉えずに支援を必要とする人にとって一番良い方法を模索した時自然と連携していた、というような支援をしていきたいと思った。愛隣館に学んだ「チーム精神」にも通ずるものがあるが、普段からチームとして当たり前にいることで、当たり前に関わり合っているような教育者になりたい。

つなプロ 熊本合宿

大学院特別支援教育専攻1年 佐藤美友貴

<合宿を通して得たこと・考えたこと>

学部時代は福祉を専攻していたが、特に専門とする分野が障害であったため、今回はあえて経験の乏しい高齢領域を選択し、特別養護老人ホームでの実習を希望した。高齢領域の4人も更に、

入所・通所・小規模多機能・グループホームの4か所に分かれての実習であり、2日目と3日目午前中の実習中は、つなプロメンバーとほぼ顔を合わせることはなかった。

高齢者の入所施設での実習は初めての経験であり、認知症高齢者との関わりも初めてであった。入所施設ということもあり、平均要介護度は高かったが、日中に自室のベッドではなくデイルームに出てくる方々は、比較的落ち着いており、穏やかな時間を過ごしているように感じた。しかし、これまでに実習やボランティアで訪問したことのある障害者施設とは異なり、利用者の活動内容の質を高めることに意味が見いだされ、丁寧に組み立てられるのではなく、衣食住を丁寧に行うという印象を受けた。食事と食事の間の時間は、私の目から見ると何をするわけでもなく、もしかしたら寝ているのかもしれないという状態で過ごされる利用者を前に、私は必死に「生きる意味」を考えていた。

なかなか答えの出ない問いではあると思いつつも、頭の中でモヤモヤ考えていたとき、丁度2月から3月に変わる時期であったので、「今日で2月はおしまいです。明日から3月。もうすぐひな祭りですね」と利用者へ声をかけをした。それに対して利用者は、「もう3月。早いねえ」との応答をしてくれた。時間の流れがゆっくりで、1日1日は長く感じているだろうと考えていた私にとっては衝撃的な答えであり、自分の当たり前で相手の生活を考えようとしていることに気づいた。そして、「生きる意味」を考える意味が果たしてあるのかどうかを考えるようになっていった。

今回、これまで経験のなかった施設で生活する方々との関わりを通して、自分の当たり前で物事を考えていることに気づけた。将来、福祉や教育の分野に進むとしたとき、他者を理解し関わることが求められる。教科書の説明だけでなく、実際に足を運び、時間を共有し、対話することは、自分とは異なる相手の世界の見方や感じ方を想像できる力を培うことにつながるだろうと感じた。

<ほかのメンバーとのやりとりを通して得たこと・考えたこと>

今回の訪問先が、社会福祉法人ということもあり、福祉専攻以外の学生にとっては、普段は意識しないような場を見ることになったのではないかと思う。実習中は特に昼食時以外は顔を合わせることがなかったので、他専攻の学生がどのように過ごしていたのか、どのように感じたのかを振り返りの時間で共有することは、非常に有意義なことであると感じた。特に今回、特別養護老人ホームでの実習を通して生じた問いに対して、他者とのやりとりによって徐々に深めていくことができたと感じているので、以下そのことについて述べる。

特別養護老人ホームの入所で実習を通して、「生きる意味」を必死に模索しようとしている私であったが、障害者施設で実習をしたメンバーの感想に「たとえ障害があったとしても、その人ができることが自然に分担され、それぞれの役割を果たしている」というものがあり、認知症を抱え、寝たきりの生活であったり、デイルームで座って過ごしたりしている高齢者と過ごした私にとっては、うまく腑に落ちない部分もあった。学部時代、障害のある方と関わり、人にはそれぞれの役割があると考えたことが私にもあったので、今回の感情は自分でも驚くものであった。

また養護教諭専攻の学生が自分の病院での経験を語ってくれたのだが、どんなに重い病気で本人の意思のもとに活動ができていないような状態であっても、関わる看護師が相手の生を意識し、尊厳を大切にしたい関わりをすることで、そこに「生きる意味」がうまれるのではないかと、この

とであった。養護教諭との会話を通して、本人の行動に意味づけをして「生きる意味」を見出すのではなく、本人に関わる人と本人の関係性が「生きる意味」となっていくという考え方も、大切な考えであると感じた。

更に後日、他人の生きる意味を考えること自体、驕りなのではないか、目の前で生きる相手に精一杯向き合うことが大切なのではないかと、という考えに至り、そのことを先生にも伝えたが、誰かのために何かを一生懸命するという以前に、ただそこにいること、寄り添うことに大きな意味があるとの答えに、今回私が立てた問いが終着したように思えた。

今回、高齢者施設での実習で生じた問いに対する答えを、他者とのやりとりを通して深めることができた。一人で考えていただけでは無限ループに陥るようなことも、他者の視点を知ること、自分なりの答えを見つけるきっかけになる。これは、その問いに対して他者の意見をそのまま自分の答えにするのではなく、他者の物の見方を知ることを通して、別の場面で生じた問いや状況に対して多角的な思考・判断をすることにつながっていくのではないかと思う。

熊本調査旅行 振り返りレポート

総合社会システム専攻2年 三品あや

今回の熊本調査旅行を振り返り、各日の活動を通して感じたこと、考えたことを述べていきたい。一日目の活動では、社会福祉法人愛隣園が行っている事業内容の説明を伺った。お話を聞き、実際に施設を見学させていただいた中で、その事業内容の多さと、それぞれの事業の魅力に驚いた。1つの法人が障害者、子ども、老人などの広範囲の分野にわたって支援を行っているのを初めて見たので、私にとっては新鮮で、感心させられた。そしてそれぞれの施設において、従来の施設のような「病院らしさ」が薄いことに気づき、このことにも感心した。利用者さんが生き生きと生活できる背景には、こういった施設の雰囲気が作り出せていることも影響しているのではないかと思った。また、一日目を通して強く感じたのは、「地域や外部の機関とつながること」の重要性だった。職員の方もおっしゃっていたが、福祉施設が生き生きと運営できるためには、地域という基盤があり、地域の理解があってこそだということを経験を通じて改めて実感した。

二日目の活動では、実習ということで、私は軽費老人ホーム愛隣荘で実習をさせていただいた。まず職員の方から愛隣荘の説明を聞き、施設を見学させていただいた中で、軽費老人ホームの特性について知り、驚いた。私が今まで接する機会があったのは元気なお年寄りが入居する施設ではなく、要介護度の高いお年寄りが入居する病院のような施設だったので、軽費老人ホームが持つ寮のような雰囲気に初めて触れることができ新鮮だった。これから高齢化が進み、高齢者が増えていく社会の中では、「高齢者の孤立」や「孤独死」がますます問題になっていくだろうと思われる。そういった問題に対する対策として、軽費老人ホームのような施設は有効なのではないだろうかと感じた。一人暮らしであっても、愛隣荘のスタッフの方々の目が行き届いている中で生活でき、「見守り」の機能が働いているこういった老人ホームはますます増えていくべきではないかと思った。実習内容としては、施設内の清掃と利用者さんと一緒に梅を見に出かける、ということがメインだった。実習を通して、利用者さんと実際に関わることができ、どのような方が入

居されているのかということが分かり、施設の様子をより深く理解することができた。また、利用者さんと一緒に外出できたことで、歩行補助といった、要介護度の低いお年寄りへの介護の仕方というものも体験させていただいたのでよかった。

三日目の活動では、二日目に引き続き施設内の清掃と、利用者さんとお話を中心に実習をさせていただいた。清掃では、お風呂場の掃除をさせていただき、思ったよりも体力仕事であるということも実感した。また、短い時間だったけれど、利用者さんとお話させていただくことで大変穏やかな時間を過ごすことができ、こちらが元気をいただくことができたと思う。実習後は研修報告会を行い、メンバー全員で各実習先での実習内容と考察を共有することができた。やはり施設が違えば学ぶ内容も異なっており、それぞれの実習先での様子を聞くことができて参考になった。また、メンバーの考えを聞いて、その考えの深さに触れることができたことも私にとって刺激になった。もっと勉強して、いろいろなことに対して考えていかなければならないと改めて感じた。

今回の熊本調査旅行においては、実際に実習をさせていただいたことで、より深く施設について知ることができ大変勉強になった。また前回の大阪調査旅行でも思ったことであるが、自分の勉強不足についても痛感させられた。メンバーの方々はみんな意識が高く、話していても自分の知識のなさを実感させられるので、私ももっといろいろなことに対して勉強していく必要があることを感じた。今回の調査旅行で感じたことを心に刻み、これから頑張っていきたいと思う。

熊本県調査旅行を終えて

大学院養護教育専攻1年 池田佳織

愛隣園は、利用者の方が主体的に生活にしているという印象を受けた。利用者一人ひとりが生活の中でのあらゆる場面に決定権を持つことができていたからである。例えば、一日の過ごし方を職員と共に考えたり、家事を手伝ったりしていた。看護実習で病院に行った経験のある私にとって、この点は病院と社会福祉施設で大きく異なる場所であると感じた。なぜならば、病院では患者の治療を最重視していることで必然的に身体的、社会的制限が生まれ、入院生活を送る上で本人の自己決定の場が少ないからである。福祉施設ケアの原則として、英国・社会保障省の報告書¹⁾は、以下のように述べている。①施設居住者は尊厳をもって生活すべきである、②市民としての権利をいささかも制限されることなく生活すべきである、③身体的および精神的な条件が許す限り、充実した能動的な生活を営む権利を有している、④自己決定という基本的権利を有すべきであって、施設から管理的に取り扱われるようなことがあってはならない、⑤一人ひとりが独自の人間であるという当たり前のことが確認されなければならない、などである。このことから、社会福祉施設は、利用者にとって「生活者」であることを保障し、「生活の場」として存在しなければならないことがわかる。

また愛隣園を訪問し、温かくて居心地の良い空間だと感じた。社会福祉施設と聞いて障害や病气、家族の事情により入居しなければならず、活気のない暗いイメージを抱いていた。しかし実際は私のイメージとはかけ離れたものであった。このような温かい空間は、空間の工夫や職員の努力によって作られていることがわかった。例えば、児童養護施設の愛隣園では、家庭の生活に

少しでも近づくように、子どもの食事の様子を見ることができるように対面キッチンにリフォームしたり、きょうだいを同室にしたりしていた。特別養護老人ホームの愛隣の家では、葉や汚物の臭いが施設内に蔓延しないように職員は管理や処理を徹底していた。

しかし、利用者の人と話をしている中で、今の生活に対する不満も伺えた。施設内に話し相手がないことや日々刺激のない生活に対する不満、また家族に会えない寂しさなどを抱えていた。これらの問題に対し完全に解決できないかもしれないが、職員が話を聴いたり、他の利用者との交流を促すなどして少しでも軽減されるように対応していく必要がある。また、地域住民との交流は利用者の生活に刺激を与えると考えられる。愛隣園では、障害者スポーツ大会に参加したり、みかん狩りを行う際に地域との交流が図られている。利用者の生活の質を向上させるためにも、利用者を「施設を利用している地域住民」として社会福祉施設や地域住民が捉え、社会参加できる場を増やしていくことが重要である。

つなプロ調査旅行レポート

総合社会システム専攻 4年 池田真優子

今回は、熊本県愛隣館にて、各高齢者施設、児童養護施設の見学、そして私は主に身体障害者の入所施設での見学・事業説明・実習を行ってきました。私が本調査旅行で丁寧に見学していきこう、と思っていたのは以下の2点、熊本県という地域性、つまり東京や他の都市部と比べて、福祉システムやサービス提供にどのような違いがあるか、と大規模な入所施設でどのように個別性を重んじた支援を行っているか、という点でした。本報告レポートではこの2点を中心に考察を深めていきたいと思います。

<地域における愛隣館を考える>

私は今回、熊本県という地域性に非常に興味を持っていました。愛隣館の職員の方のお話では、この地域でこのように障がい者や高齢者のサービスを提供している事業所は多くなく、競合他社がない、施設としては本人の希望でほかの施設や福祉事業所での体験、比較を通じていろいろ選択肢を知ってほしいという考えはあるものの（この考え方自体、なかなか公言できるサービス提供者はおらず、きちんとしたサービスを提供して利用者の方に満足してもらっている自負があるのだな、と感動しました）、なかなか資源として存在しないという話を聞きました。

私の祖父母が暮らす北海道の田舎でも、デイサービス事業所が地域にひとつしかなく、担当者に紹介された事業所に選択肢も与えられず契約しており、利用者の契約制度に基づく自己決定権が十分に満たされているとはいえません。どんなにすばらしいサービスを提供している事業所であっても、個人の価値観や生活によって合わないことも十分考えられ、それを「わがままである」と必要なサービスが提供できないことや、我慢を強いることは問題です。しかし、行政の制度として、人口の少ない地域に複数の福祉事業所を設立することが事業者側の大きな負担になることも予想されるので、ここは全国規模で考えていかなければいけない課題であると思います。その上で、今回愛隣館で学んだことは、どれだけ限られた社会資源である施設、ないしは福祉資源の質をその提供者自らが向上していくことの重要性です。競合他社がおらず、これだけ歴史の長い

社会福祉法人はある一定の利用者が途切れないため、利用者の減少による経営難は他の地域や事業所と比較して少ないほうではあると思いますが、そこに甘んじず、真摯に利用者に向き合い、職員全体が統一して高い意識をもっていく姿を見させていただきました。利用者の方には「そりゃ家で住めればいいけど、ここもいいところよ。いっぱい施設あるけど、ここ（愛隣館）は最高よ（笑）」と話された方もおり、いかに丁寧な支援が一人ひとりに提供されているかを感じました。日々の介護の質だけではなく、サービス管理責任者の方が長年その施設で働いている職員であることも、利用者には大きな安心感を与えていると思います。どんどん若手やパート職員は入ってくるけど、知ってる・信頼できる職員が複数おり、そして新しい信頼関係をつくっていく、という状況は離職率の高い現場ではすばらしいことだな、と思いました。

<入所施設における個別性の支援>

私は来年度より、地域での生活、つまり施設を持たずなるべく自宅やグループホームでの生活を支援していくことを理念にもつ法人に就職するため、地域生活というキーワードにこだわりをもっています。その上で、愛隣館は施設の中でも個別性、そして生涯にわたる支援を大切にしている実践を行っているとお聞きしていたので、それがどのような形で行われているのかとても興味がありました。そして、今何らかの障害、特に重度の障害があり地域生活をあきらめざるをえなく、集団の施設で生活しているとしても、その中でできる限りの自分らしい生活を保障できるという姿を見させていただきました。具体的には、愛隣館の実習の中で入所者の方で、入所後に社会福祉士の資格を取得し、現在施設内で相談支援の仕事をしている方、愛隣館のデイサービスの元利用者で現在ピアカウンセラーとして活動されている方、そして車椅子マラソンに自ら挑戦し、30時間以上かけて完走された方のお話を聞いて特に実感しました。愛隣館のサービスにいたるまで、利用者の方はある程度重度といえる障害を持っており、全介助を要する利用者も多くいます。その中で、本人が信じた本人の可能性を職員が全力で応援すること、そして達成させること（マラソン）、そして本人すら気づいていない可能性を専門性に基づいて発見し、本人の気づきや前向きな努力を促す専門性（相談支援、ピアカウンセラー）が実際に日常的に行われているのだ、と思いました。このように施設内でも目立った活動をしている方だけではなく、風船バレーやボッチャといった障がい者スポーツを見学、体験させていただいたことを通じて、身体機能の維持や向上、レクリエーション的な意義のみならず、利用者の可能性を日常的に見つけようとしている場面を見せていただきました。

このように、愛隣館ではさまざまな面を見せていただきました。しかし、全国的に視野を広げると、「生まれた地域にこういう施設があるからラッキー」なのだと思います。このように試行錯誤をしながらも利用者の立場を大切にサービス提供をしている地域が日本全国どこにでもあるとは考えられません。このような取り組み、特に精神的な理念などをスタンダード化し、生まれおちた地域の福祉の質で社会的に弱い立場の人の生活が左右されるというような現状が少しずつでも改善されていくことを願います。

愛隣館に入って感じたことは、とても穏やかな時間が流れており、家のようなものであるということである。消毒の匂いや薄暗さなど多くの施設にあるそれらが一切感じられなかった。これは「利用者にとって住まいの場である」という意識を職員の方々が持っていらっしゃること、利用者が自らの住まいの場としてその場所にいること、住まう者の権利を行使出来ること、これらのことが揃って実現されているのだと思う。職員の方は、利用者の方が望まれることにはできる限り、利用者の方の挑戦を全力でサポートしていた。また、職員と利用者という区別なく、施設内の食堂で作られる同じ食事を摂っていた。そして、利用者の方々は自治会を組織し、施設内の部屋割りをはじめ自分たちで決めることをしていた。こうして過ごす利用者の方々はとても生き生きとしていた。施設というと、閉じられた空間で利用者が受動的になりがちなイメージをしがちであったが、愛隣館はその例外であった。利用者の生活に制限はなく、本人の意思が尊重される環境であり、それぞれが役割を持ち、能動的であった。

マラソンに挑戦した利用者の福原さんがお話をしてくださった。トレーニングを重ねて走る距離を少しずつ伸ばしていき挑戦するも、一度目は途中で自らリタイアを宣言し涙を流されていた。そして、二度目の挑戦で完走された。福原さんはもちろん、そばで走り続けた職員の方やボランティアの方々も目に涙浮かべており、映像を見ている私でさえ涙浮かぶ程に、その真剣さ、必死さが伝わってきた。車椅子で後ろ向きに数メートルしか進むことの出来ない人が、フルマラソンを完走するということはとてつもない挑戦であったと思う。この挑戦の宣言に対して、誰もが無理という言葉を使わず、その目標の達成のために一丸となっていた。他の施設でこのように一人の利用者のために取り組むことは難しいのではないだろうか。愛隣館にて実現を可能とするのは、職員の方々皆さんが「あきらめない」「ことわらない」「丁寧な個別支援」の3つの理念を理解し、実行しているからであると思う。福原さんの挑戦を考えても、「難しいのではないか」というのが多くの人にとって一番に思い浮かぶ答えだと思う。それを愛隣館の方は「じゃあ、できるようにするにはどうすればいいだろうか」と考え、車椅子の改良などに着手していた。

「あきらめない」「ことわらない」というのは決して簡単なことではない。危険なリスクが伴うこともある。そうした難しいことに対して、愛隣館では施設内の専門職種が連携をとれているから行動に移せるのではないかと考えた。職員の方のお話の中で「専門職種の意見の対立は毎日のようにある」とあった。これは、それぞれが自分の職務に対して強い責任感を持っているが故であり、皆が利用者の生活の充実など当事者のことを考えているが故であると思う。専門職種が連携するとき、当事者のためであるということと自分の職に対する責任を自分が持つてものとして必要であることを学ばせていただいた。

これらのことは、愛隣館に限らず愛隣園の児童養護などのそれぞれの施設でも感じられることであった。園全体ですべての職員が同じような意識を持って当事者と向き合えることは施設のあり方や支援のあり方としても非常に重要なものであることを感じた。こうした理想となる姿や連携のあり方など実に学びの多い調査であった。

愛隣館では、施設とは閉鎖的な空間で利用者には自主性が確保されていない、という今までのイメージを覆されたように思う。施設の中はゆったりとした時間が流れ、利用者の皆さんは生き生きとしていたのが印象的だった。また、施設の中で利用者に自治会長や相談員などの役割があり、利用者であり支援を受ける側であることがその人のすべてではなく、利用者であることは個人を形成する要素の一部でしかないのだと思った。さらに役割や仕事を与えられることは生きがいになり、施設内においては利用者対支援者の関係のみならず利用者間との関係の構築にもつながることから、閉鎖的空間では失われがちな社会性を保つことも可能になっていると考えられる。

児童養護施設（愛隣園）では、家庭的な雰囲気を持てるようにとオープンキッチンで職員と子どもたちが顔を合わせる機会が多いように配慮されていた。また、職員も児童と同じようにハウスの中に部屋があり生活しているという。しかし、職員自身のプライベートはどのように確保されているのか疑問点として残った。

重度身体障害者の通所施設である愛隣倶楽部では「言語障害があるが意思疎通のできる方とのコミュニケーションを図る」ことを目標に実習を行った。言葉の理解自体には問題がないが発語が困難な方との関わりが多かった。そのため私の発言はスムーズに伝わるが、相手の言葉を受け取るのに時間がかかってしまった。ある男性は左腕のみしか自由に動かすことができないため、腕の曲げ伸ばしでYES/NOを伝えることで意思表示を図っていた。職員が五十音を言い、タイミングを合わせて腕を曲げることで文章のやり取りも行っていた。言葉で伝えられなくても本人には伝えたいことがあって、それを受け取るためにどのようにしたらいいのかを考えていくことを支援する側は忘れてはいけないことを実感した。しかし、彼との会話の中でタイミングがうまく合わせることができず言葉をうまく受け取れないことが何度かあり、悲しそうな表情をさせてしまった。私自身ももどかしさを感じたが、おそらくご本人は頭の中にある言葉を相手に伝えられないもどかしさを常に感じているのではないかと思われた。利用者と話していると、「昔はできたのに」という発言が多くみられた。徐々に身体が利かなくなる不安や、できないことが増えることをどのように受容していくのか、そのうえで前向きに生活していくことが大きな課題なのだと感じた。先天性と後天性の障害受容の過程や乗り越えるものの性質には違いがあることが予測される。また、「ここに来ればみんないるから楽しく過ごせるが、家族がいないのは寂しい」といった言葉も聞かれた。サービスを提供したり関係性を構築したりすることで、クライアントの生活を支えたり楽しみを分かち合ったりすることはできる。しかし支援者はあくまで支援者でしかない。最終的には本人が障害を受容していくしかなく、支援者はクライアントの親やパートナーにはなれない。これは福祉の現場の限界であると感じるとともに、その限界はクライアントが一人の人間として生きていくには必然であるか重大であるのかとも思った。

就労支援移行支援事業所では「できないものをできないままにしない」ようにしているそうだ。「できない」には、物理的なものと技術的なものの2種類があると思う。技術的困難に対して工夫や訓練を積み重ねることで、できるようにしていくのは障害の有無にかかわらず誰にとっても同じことだと思う。障害者が今できることだけに目を向けているだけで企業とのマッチングを重

ねても障害者雇用の幅は広がらないだろう。障害者の一般企業への雇用の拡大のためには訓練すればできるようになることへの視点、つまり、今できないことをできるようにしようとする心構えが必要である。そのためには、支援者も障害者自身も「障害者だからできない」という障害を盾にした考え方ではなく、「障害があってもこうすればできる」という前向きな考えを崩してはいけないのではないと考えた。

熊本調査旅行調査レポート

N 類生涯学習専攻 3 年 木村奈津子

<はじめに>

本レポートの目的は、HATO プロジェクトの一環である熊本調査旅行で学んだことや考えたことを整理することである。これによって、この調査旅行をただ「行った」、「知った」で終わらせるのではなく、自分自身の知識、経験へと変化させることができると考える。実際に実習と言う形で業務に携わらせていただいたことから、より実感を伴った形で現場をイメージすることができた。この経験を通して感じたこと、考えたことをまとめる。

<1 日目(愛隣館、愛隣園、愛隣の家 見学・ガイダンス)>

愛隣館は「己の如く汝の隣を愛すべし」という理念のもと、現在は常時介護を要する身体障害者の方々に対して必要な援助を行っている。始まりは少年院の子どもたちに対する支援からだということを書いて少年院と介護が結びつくことに意外性を感じた。また、児童養護施設、愛隣園では、初めて児童養護施設を訪れたことと、人様の生活空間を見させていただくことの罪悪感で、とても緊張した。詳しく聞いてもいいものかとも考えさせられたし、対面キッチンや食卓、兄弟と一緒に過ごす家があることが当たり前ではないということを確認した。

最後、愛隣の家では、平均年齢 89 歳、最高年齢 102 歳、全員認知症などという施設の状況報告だけでも驚かされるどころが沢山あった。見学させていただいて思ったのが、番地表記という細かい工夫が施設での生活に日常を感じさせる配慮になっていることや、匂いがないことだ。そのためか清潔感と優しい雰囲気があると感じた。

<2 日目(愛隣荘にて実習)>

愛隣荘：愛隣荘は、60 歳以上の身寄りのない、利用料が納められる(利用料は所得に応じて変わる)、自分の事は自分でできる健康な方が利用できる入居施設である。スタッフさんは“老人アパート”とおっしゃっていたが、まさにその通りで、日中の過ごし方については食事の準備に影響が出るため、食事の有無だけは伝えなくてはならないが、基本的には自由である。昔は畑をし、そこで実った野菜を自分たちで調理して食べる光景が日常的に見られたそうだ。今は、ヘルパーさんを頼んでいる利用者さんが多く、そういった活動的な様子はなく、基本的に自室にて過ごされている方が多かった。また、熊本出身の方が多くと思っていたのだが、入居者さんの中には青森からきている方もいたりして、日本中から愛隣荘に入居したいと望む声が絶えないのだという。

→軽費老人ホームにて実習をさせていただいた。実習をするという心の準備が整わず、不安もあったが、施設のスタッフさんをはじめ、利用者さんが優しく接してくれたため、自分の役割を

全うできたと感じている。清掃をしたり、梅見学やお買い物に付き合ったりしただけであったが、沢山の利用者さんに感謝され、お礼を言われた。私にとっては、全く負担に感じない“〇〇しただけ”の行為が実はとても役に立つのだということに気付くことができた。また、スーパーをはじめ、サービスを提供する場は利用者の目線をきちんとくみ取った配列や環境づくりを心掛けるべきであり、それが最も大事であると感じた。というのも、商品が平積みになっていることを受けて、上にあるものには手を出さない場面や、表示が小さすぎて読めないで苦労している場面や、カートが通れないほど狭いために渋滞になっている場面が見られたのである。若者であったら差し支えがないのかもしれないが、お年寄りにとってはとても買い物がしづらい環境だと感じた。自分の目線で物事を考えるのではなく、お年寄りや子ども、障害者の目線で物事を考える必要があると感じた。

<3日目(AM：愛隣荘にて実習)>

2日目の実習内容は、お風呂の清掃と入居者さんとのお話だった。愛隣荘は基本的には自分のことは自分でできるお年寄りが入居するのだが、最近では、ヘルパーさんを頼んでいる入居者さんが多く、お風呂にも背の高い座椅子が用意されていた。タイル張りであるため、滑らないよう、良く洗い、良く流し、桶等に関しては、水気も拭き取った。私たちが二人でやっても相当な時間がかかったため男子・女子風呂を一人のスタッフが清掃すると聞いたときは驚いたとともに尊敬した。お風呂の清掃の後は、実習終了まで、100歳のおばあさんとお話をさせていただいた。戦前、戦中のお話等を聴き、普段全く考えないような、会話をすることができた。耳が遠いことから、私たちの反応は目で見ていっただけが情報となるにもかかわらず、お話は面白く、聞き入ってしまうほどで、とても有意義な時間を過ごさせていただいた。軽費老人ホームという存在を知らなかった私にとって、“老人のアパート”としてどういう運営をしているのかを実際に見たり、携わったりすることができ、とてもいい経験ができた。

<まとめ>

先進国でも類を見ないスピードと規模で少子高齢が進む日本において、高齢者の介護等は重要な課題であるといえる。孤独死の報道が増えていることも考慮すると、介護の有無にかかわらず、誰かと過ごすことで生きがいを感じたり、人生に張りが出てきたりするのかもしれない。軽費老人ホームはその点でとても理にかなった施設であると感じた。独り身になってしまった老人に関係性の薄くなってしまった地域社会の中に埋もれさせないためにも、“老人アパート”として迎えることができるのである。現在は制度が変わったことにより、ケアホームしか建てることができない。軽費老人ホームは15名、ケアホームには2名の従業員が配置され、そこに外部のヘルパーさんがやってくる形になる。スタッフさんのお話だと、15人と2人では雲泥の差だから、このままが良いとのことだった。施設のあり方は制度に左右されてしまうが、私が気になったのは、介護認定が1でも愛隣荘で面倒を見るのは大変で、2や3になると本当に難しくなってしまうという現状だ。特養に入るためには4や5が必要の為、軽費にも特養にも入れない方が存在するということに危機感を覚えた。私は軽費と特養の間に新しい介護施設の区分を作ることが求められると考える。福祉の課題は多様で、一つの打開策を採択すると、必ずそれから外れてしまう人が現

れる。いちごっこのようになってしまわざるを得ないのかもしれないが、そのように外れてしまう人を救うために、新しい打開策を考える必要があると感じた。

熊本調査旅行を終えて

養護教育専攻 2 年 鈴木春花

今回の調査旅行では、社会施設法人愛隣園が開設する施設の見学・実習を通して「生きる」について考えることができた。愛隣園は障害者支援施設、児童養護施設、軽費老人ホーム、介護老人福祉施設を開設しており、そこでは一人ひとり様々な課題を抱えた利用者が生活をしている。

一日目、どの施設を見学しても利用者はいきいきとしていた。それが非常に印象に残っている。重度の身体障害を抱える利用者が風船バレーをしている姿を見ていると、全員が笑顔で何とか風船に触れようとしていた。誰一人、バレーをさせられているわけではなく、自ら楽しんでた。いきいきとしているということは、つまり生かされているのではなく、(自ら) 生きているということだ。

私は、生きるためには生きる意味が必要であると考えている。「人はなぜ生きるのか」について考えたが、生きる意味というのは自分で作るものではない。周囲の人に大切にされ、期待され、そしてその人らしい役割を与えられることで生きる意味が作られる。愛隣園では利用者のその人“らしさ”を認め、その人“らしさ”を必要とし、その人“らしい”役割を見つけ、利用者の生きる意味を生み出していた。

愛隣園では、利用者一人ひとりに生きる意味を与えている。例え食事や排泄が上手く自立できない寝たきりの利用者であっても、生きる意味はある。相手を“障害者”、寝たきりの“患者”ではなく、一人の人間として扱い、「あなたが大切である」という思いを持った職員の関わりが利用者の生きる意味を生み出している。

利用者がいきいきと生活していることはスタッフの生きる意味につながる。利用者は職員の支援を求める。職員が行う利用者への支援は職員“らしい”役割であるし、それを求められ、さらにその支援によって利用者がいきいきと生活しているならば、それは大きなやりがいになるだろう。愛隣園では、利用者と職員の誰一人生かされている人はおらず、各々の場所での生活を自ら楽しんでいるように見えた。

今回の調査旅行での学びを、私の将来の教員生活に活かしていきたい。学校は子どもが将来生きていくための基礎づくりの場所である。そこでの教師との関わりは非常に重要であるし、生きる意味というものを伝えていかなければならない。そのためには子どもの一人ひとりの“らしさ”を大切にされた役割を与えてあげることが必要であり、愛隣園での取り組みと共通であった。

「生きる」ということは人間の最大のテーマであると思う。どう生きるかを寄り添いながら一緒に考えていく姿勢が福祉でも教育でも必要なのではないだろうか。

今回は、地域福祉を包括的に行う愛隣館の児童養護施設や障害者地域活動支援センター、障害者グループホームなどいくつかの施設を見学・体験させていただいた。私にとって施設という福祉の現場に入る初めての機会であり、学ぶことの多い3日間となった。

1日目は各施設の説明、案内をしていただき、その事業の幅広さと地域福祉を担うということの規模の大きさに驚いた。人々が根を張る地域という場には子どもからお年寄りまで様々なニーズを抱えた人が混在しており、それに対応するには包括的かつ個別的なケアが求められる。愛隣館にはそのケアが揃っており、地域で地域を支えているという印象を受けた。「個別ケア」・「あきらめない」・「断らない」という考え方により、施設に様々な工夫などが見られた。「できるだけ個人の部屋をつくりたい」「病院ではなく家のようにしたい」という施設の心遣いにより、子ども部屋も仕切りを使って1部屋ずつになっていたりと、部屋名を番地で表現することで病室の雰囲気はなくしたりなど、施設でありながらも個人を尊重する点は他とは違うと感じた。また、どんな障害やどんな問題を抱えていても決して入所を断らないということは大変難しいと思うが、軽度から重度の人まで全員が明るく楽しそうに施設で過ごす姿を見てケアがどんな人にでも行き届いていることが分かった。2日目には私は、重度の身体障害者の方が通所する生活介護事業所で実習をさせていただき、「言語障害で意思疎通の難しい方とコミュニケーションをとる」という課題のもと、利用者の方と会話や施設の片づけを行った。初めての实習、初めての人との会話ということもあってはじめはとても緊張し、人見知りをして利用者の方に声をかけることをためらっていたのだが、せっかくの実習なのにもったいないと思い直し、積極的にコミュニケーションをとった。普通に話せる人もいれば、筋ジストロフィーで手の上げ下げで会話をする人もいた。なかなか言葉が聞き取れず、会話には苦戦したが、そんな私に対しても利用者の方々は優しく話しかけてくれた。筋ジスの方は私がかうまく理解できないと悲しい顔をし、会話が通じると嬉しそうに笑っていて、「話せる」ということがどれだけありがたいことであるのかを感じた。途中、自分のペースで話を進めてしまい、質問を急かしたり問い詰めたりしてしまう場面があり、相手の気持ちになって考える難しさがあった。その時に「相手の目を見て、呼吸を感じる」というアドバイスをいただき、アイコンタクトや相手のペースを感じる必要性を学んだ。話せない人からいかにニーズを聞き出すのか、非常に難しいものではあるが、「あきらめない」姿勢で臨むことが何より大切だと分かった。3日目も同様に「あきらめない」大切さを地域活動支援センターで感じた。そこでは、就活移行支援などを行っているのだが、福祉のストレングス視点である「できることを伸ばす」という考えではなく、「できないことをどうできるようにするか」と考えることが就労につながると教わった。確かに、目の見えない人に目に見えるようにしろと言うのは差別であるが、目の見えない人に目が見えなくても作業ができるようにするのを考えるのは必要なことである。ついできないことは諦めてしまいがちだが、片麻痺の方が仕切り板で作った仕掛けによって箱作りの作業を素早くこなすのを見て、小さな工夫・支援があれば障害者の就労もずっとしやすくなることを感じた。そうやってできることを一つずつ増やすことは本人の自信にもつながり、自立につ

ながる。支援とは本来できないことを代わりに全部やってあげることではなく、できないことをできるように少しだけ手を貸すことである。私たちは彼らからできることを奪ってしまっているのではないだろうか。今回の調査を経て、行き過ぎた福祉が広がらないようにしていくべきと感じた。また、良い意味で施設っぽくない愛隣館を見て、地域福祉のあたたかく、家庭的な雰囲気は利用者が安心して暮らすために必要だと感じた。地域や人をつなげる地域福祉はつながりが希薄化した東京のような都会で今後求められていくものであり、様々な地域福祉や施設を実際に見たり、中に入ってみたりすることで今後さらに勉強していきたい。

NPO 法人ハックの家／岩手
個人別視察レポート集

岩手調査旅行レポート

特別支援教育専攻 3年 久保田裕斗

この調査旅行で一番私のためになったものは、被災地に住む方々となつなうることができたことである。3.11以降、私はほとんど震災にリアリティを感じるができなかつた。東北に住んでいる家族や親族もいなかつたし、そもそも大学の入試や入学の準備、その後大学になれることに必死で、あまり考えている余裕もなかつたのかもしれない。被災地に行くことが大切であると頭では分かつていながらも、その機会をずっと逃し続けていた。そして、今回こうして3.11とは無関係の関心で入った自主ゼミでこうして被災地に行く機会をいただくことができた。

今回の旅行では原発についてはあまり触れる機会がなかつたが、3.11という契機によって日本の重大問題として原発の議論は盛り上がりを見せた。しかし、個人によってその震災や原発についての受け止め方やリアリティは、あまりにも違っていた。データによると、原発に対する忌避感や放射能に対する不安は原発のある地域と首都圏でとりわけ高く、西日本に行けば行くほど低くなり、九州では震災前と全く変わらない。こうした状況の中で原発事故を語るだとか、震災後の日本をどうするかという言葉が、リアリティあるものとして響かない人たちは多く、そのうちの一人が私であった。けれども、日本全体で考えて決定を下さなくてはならない問題は山のようにある。この3.11のリアリティを持つ者と持たない者の間に横たわる断層線をいかに越えるのか。これは喫緊の課題であり、その問題意識は被災地に行く前から持っていた。

今回の調査旅行で分かつたことは、その断層線を越えるための一つの答えとして、「被災地に行くこと」、そして「被災地に住む人に会うこと」が、かなり有効に機能するということである。

実際に被災地にボランティアに行った友人から「被災地に行くとなり値観が変わる、全然違う」という話を聞いていたが、東京にずっといた私は、それほどその言葉を信じていなかつた。いや、もちろんもっともな意見だとは思っていたのだが、実際に被災地に行った後では、やはりその友人の言葉を信じきれていなかつたのだなあ、と思う。やはりもっと早く被災地に行っておくべきだった。実際に行つてそこにいる人に会つた後では、自分の持つリアリティというか、自分の問題としてとらえられる度合いが全く違う。

今日まで被災地に住む方々は、3年たつたこともあるのかもしれないが、普通に暮らしているように見えた。しかし、まだまだ終わりそうにない復興作業や、引きこもりの数が増えていることなどを見聞きすると、やはり震災が東北の人々に落とした影は深いことを実感する。今回会つた方々は東北に住むほんの一部の方々にすぎない。実際に調査旅行終了後に会つたもっと内陸に住む方は、津波の影響もあまり受けなかつたようで、比較的あつげらんとして見えた。「0」の状態からこうして少しでも人に会い、「1」にすることには大きな意味がある。被災地の方も「来て下さるのが一番の支援になる」と語っていた。

つなプロ調査旅行 岩手

総合社会システム3年 江藤瑞希

<全体の振り返り>

昔から津波がよく来る町で避難訓練も行つていた町であれだけの被害や課題があつて、普段防

災の意識の低い地域に同じ事が起こっていたらもっと参事になっていただろうと思います。その中でも小さい子供をバケツリレーして運んだり、足が早い人を先にいかせることでおそい人が追いつこうと必死になり、多くの人が助かったという事実があることから、やはり日頃の防災訓練の大事さも確かにあることを感じました。また震災後からは、「津波が来る10分前には自分の命を一番に考える」などの新しい町のルールも出来ていたり、人々のものへのありがたみの気持ちが強くなったとお聞きしました。しかし、岩手のそういった経験や新たな知恵はあまり広まっていないように思います。報道が多くのことを知らせてくれているように思いますが、現地に行って生の声を聞く事が大事だと思います。震災から3年経って報道も少なくなってきた今こそ目を向けるべきだと思うようになりました。学校教育の場で多くの子どもたちに震災の学習を提供することが必要（現地に実際に行く課外授業など）だと感じました。また、それに対して自分の意見を持つ振り返りの時間を重要視すべきだと思います。わたしも小学生の時神戸に行って震災学習をしたことがありますが、現実味がなく、被災された方に日頃から震災に備えることの重要性を教えてもらいましたが、すぐに忘れてしまいました。子供だけではなく大人も含め、震災を忘れないためにどうすればいいのかはとても難しい問題ですが、考えなければならないことだと思います。わかめ業者が港に寝泊まりするために、その流れでまた海の近くに住み着いてしまわないか、防波堤は高くすべきなのか、新しく出てきた問題にみんなで考えなければならないと思います。被災したことで浮き彫りになった地域の課題が見えてきたことも多く、そのことはわたしたちにとって無関係ではないと思うからです。わたしは現地に行くまで復興とは町を元通りに戻せばそれば済む問題だと思っていました。しかし、社会の問題、人々の生活の問題、精神的な問題など問題は複雑で、被災した地域だけが考えることではないです。まずは、被災していない人がどう震災復興に関わるべきなのかを考えるべきだと感じました。しかし、わたしもふくめ、被災していない立場の自分が被災した人にどう関わればいいのかは難しい問題です。崩壊した建物を立て直すには、同じ場所でなければならない、他の家に自分の家が押しつぶれられても他の家の住人の許可がないと動かせないなど、まちの作り方や人の意識だけでなく、制度的な問題も多いことがわかりました。この分野においては勉強が必要だと感じました。

<他学科の関わりの中で>

被災している時も、直後も、その数年、数十年後も、「連携」というのは復興する際に重要になってくると思います。今回、震災が原因でひきこもりになった子が大勢いるとお聞きしました。そういった人を発見するのは地域の力が重要であり、その子たちに関わって行くためには学校との連携が必要です。防災訓練の強い学校が多いことは今回のことでよくわかりましたが、震災後の力はわかりませんでした。今回の調査に参加した養護教諭を目指す学生と「震災」に特化した話し合いや意見を交わす機会が欲しいと感じました。震災の時養護教諭はどういった動きをするのかが知りたいです。

岩手 NPO 法人ハックの家視察

N 類カウンセリング専攻 4 年 江頭拓也

本視察では NPO 法人ハックの家の見学と田老の学ぶ防災を始め東日本大震災およびその津波に関する話を聞いた。

今回の視察は震災から 3 年目を迎えようとしている時期に行われたが、いまだ津波の被害から復興の道半ばに置かれている状況を見ることになった。岩手はその地形の特徴から村と村の間に山があり、それぞれの村や地域の特徴を見ることができた。復興に向かって街の再建が進んでいる地域や津波によって壊された堤防がそのままになっており、復興がいまだ進んでいない地域もあった。それらの違いは財政的なことも大きくやるせなさも感じた。また学ぶ防災の田老では震災以前も津波が多い地域で、防災に関する様々な工夫がなされていた。しかし震災および津波のときに話を聞くと最も大事なことは工夫よりも津波に対する考え方だと感じた。亡くなった人や避難できた人たちの話を聞くと津波に対する考え方の違いを感じた。亡くなった人はさまざまな工夫がされているから大丈夫であろう、今までも大丈夫だったから今回も大丈夫だと思っている人が多かったという話を聞いた。しかしその考え故避難をせず、あるいは避難してもすぐに戻ってしまい亡くなったということであった。つまりどれだけ工夫がなされていても逃げないことには助からないということである。これは震災に限らず様々な場面でも同じことが言えると感じる。施設内虐待や身体拘束などが起きないようにどれだけ工夫がなされていても、「もしかしたら起こるかもしれない」と思っていなければ、もしそれが起こってしまったときに気づけないということと同じだと思う。さまざまな工夫をすることは大事であるが、どれだけ工夫をしても何かが起こるかもしれないことを考えておくことが大事だと感じた。

ハックの家では誰がスタッフで、誰が利用者で、誰が地域の人かぱっと見わからなかった。これは互いにオープンな関係が実現しており、ハックの家が地域に溶け込んでいるからそのような雰囲気があったのだと思う。ハックの家では、ハックの家の利用者が先生となり地域の人に何かを教えるという活動や自分たちができないことは逆に地域の人に教えてもらうという活動の話を聞いた。できる人ができない人に何かを教えるということは日ごろから様々な場面でみられることであり、それは誰もができる人の側、できない人の側両方にあることが当たり前である。しかし福祉の場面では利用者はできない人の側に追いやられてしまうことが多い。そのため、その当たり前が行えているからこそハックの家は地域に溶け込んでおり、また誰が誰かわからないといったことが実現できるのだと感じた。

岩手調査旅行レポート

養護教育専攻 3 年 新田由佳

初めて被災地を訪問し、東日本大震災から 3 年経った今でも復興に向けた取り組みが進んでいる場所と、未だ大震災の爪跡が残っている場所を見ることができた。今回の調査旅行を通して、私が大きな学びを得た 3 点を以下に示す。

一つ目は、「学ぶ防災」に参加した際に学んだ、防災意識を持つことの重要性である。今回の東

日本大震災では、大津波の到着まで 40 分程の時間があつたにも関わらず多くの命が犠牲になつたのは、防災意識を妨げるものがあつたからだ。防災意識を妨げるものとして、「集団同調の傾向」、「正常化の偏見」、「エキスパートエラー」が挙げられていたが、命を守るためには、何かを信用することなく、逃げる意識を持つことの必要性を学ぶことができた。人を助ける前に、まずは自分の命を守る、その防災教育を教育現場では行い、生涯に渡る防災意識を身に付けさせる必要があると考える。

二つ目は、社会福祉施設での継続した支援、地域での活動の重要性である。今回の調査旅行で訪問した「ハックの家」では、様々な事業に取り組み、利用者の方々の性格や特徴に合わせて、力を発揮できるように考えながら、支援されている様子を見ることができた。利用者の方々、スタッフの皆様も被災されているのにもかかわらず、前向きに復興に向けた取り組みをなされ、震災を機に施設も良い状態になつたとお話されていた。様々な事業の中でも特に印象に残つたことは、子どもに対する支援についてである。ハックの家では、学童保育も施設で行い、幼少期からの継続した支援を施設で行うことで、その子どもの特性を理解して、将来への支援に繋げることができる体制づくりを行っていた。継続した支援は、適切なアセスメントにもつながることがわかつた。また、ハックの家では、カフェやパン作り、ルアーや咲織りの事業だけではなく、物資の配布やさんさ踊り、避難訓練など地域での活動も中心に活動されていた。社会福祉施設だけではなく、学校でも同じことだが、地域あつてこそ、充実した活動につながり、子どもたち、利用者の方々にとつても、地域の人々との交流が、日頃からお互いを支えて生きる基盤となつていくのだと考える。

三つ目は、私たちが被災地の復興のためにできることは「考えること」ということである。今まで、被災地の復興のために、何も力になることができない自分を無力にも感じていたが、ハックの家で被災地の現状を聞いた際に、自殺や不登校、引きこもりの多い現状を知つた。被災地から遠くにいるからこそ、違つた視点で対策を考えて欲しいという施設の方からの言葉に、意欲が沸いたと同時に、戸惑いも感じた。自殺や不登校、引きこもりの子どもたちに対する支援として、学校に通うことが一番の目標ではなく、将来を見据えた社会でどのように生きていくか、生きる意欲を引き出す必要があると思う。しかし、家族を失つた悲しみ、大切な故郷が津波によって破壊された現実を受け入れ、前を向いて人生を歩んでほしいと他人から言われても、簡単に人は前へ踏み出すことはできないと私は考える。はっきりとどうすればいいかはわからない。励ます言葉をかけたり、早く前を向いて歩いてほしいと促したりすることは、困難なことなのかもしれない。大切なものを失つた悲しみは、すぐには戻つてはこないからこそ、落ち着いた生活をするまでには、時間がかかるのだと思う。しかし、私たちが忘れないこと、どうすればいいか、共に考え、寄り添うことはできるのだと思う。

この震災を通してもう一度自分自身ができることは何か、将来養護教諭を目指す者として、子どもの命を守るためにできること、子ども自身が命を守るために身に付けさせることは何か考えていきたい。そして、地域の中で、生活していくこと、支えていくことには、どのような活動ができるのか考え、これからの学びに活かしていきたい。

今回、様々な人のお話を聞いていて、以前授業で読んだ「三陸海岸大津波」（吉村昭著 2004 文春文庫）を思い出した。今回の旅行を終えて読み返してみた。

まず第一に気になったところは、この本には防波堤ではなく、防潮堤と書かれている。また、防潮堤と防波堤の違いが判らず、調べてみると、「防波堤は、沖合いに堤をつくって、外海から打ち寄せる波を静かにすることで、港や湾内の船や設備を守るための構造物。これに対して堤防は、沿岸の道路や住宅地への波の侵入や河川の氾濫を防ぐための構造物」とされている。しかし、田老でのお話や、竹下さんのお話の中では、防波堤ではなく、防潮堤だったから崩れてしまったのだ、ということ指摘されていた。ささいなことかもしれないが、このように小さなことから情報が間違っ共有されてしまうことで、今後の政策や対応が変わってきてしまう恐れがある。復興にむかって様々な取り組みをこれからさらに本格化させていかなければならないが、噂に流されてしまわぬよう、私たちも気を付けなければならないと思った。

また、この本の第一章の本文中に、明治 29 年の津波の際には、「精神的な打撃を受けて記憶を失った者は各町村にあふれていた」という記述があった。今回の津波の被害で記憶障害が出た、という話は、私は聞いたことがない。しかし、PTSD は事件・事故発生から数年たった後に出てくることもあるという。三年たった今、復興の方向性もある程度決まり、慌ただしさも消えかけていおり、精神的なケアが最も必要なのではないかと思う。田老の“学ぶ防災”の際にも、「こうして学んでくれる、ということが一番力になる」というお話をされていた。忘れられていく、取り残されていく恐怖と、落ち着いてきたからこそ考えてしまうことが多くあるのではないだろうか。しかし、心のケアと言っても金銭の問題以外にも、狭い村の中でどこまで心理士や精神科医などが入っていくことが出来るのかという問題もある。村全員のことを知っている状況では、いまさら精神科医の元へ通うことが難しい人もいると思う。また、元いた場所から離れてしまった人も多くいる。その人々のケアは誰が行っているのだろうか。同じ体験を共有しているということで、自分の今の状態を話すことができ、支え合っている人々もいると思うが、外部に転出してしまった人は、知らない土地で位置から関係を作り直さなければならない。三年たち、経験を話そうとしたときに、聞いてくれる人はいるのだろうか。政府の援助は届いているのだろうか。

復興と一口に言ってしまうが、ハード面の復興だけでなく、ソフト面の復興にもこれからはさらに力を入れていかなければいけない。また、ハード面の復興のように、進んでいる地域と取り残されてしまった地域の二分化にはならぬようにする必要もある。しかし、今回の調査旅行を通じて、私にできる最も効果的なことは、無関心にならないようにすることだと竹下さんや“学ぶ防災”を受けて思った。復興を成し遂げる人々は東北に住んでいる人たちである。大きくは携わることにはできないが、忘れないことがソフト面・ハード面への支援につながっていくのではないかと思う。

岩手調査旅行レポート

総合社会システム専攻1年 石井道子

1日目は、学ぶ防災で田老町に行き、海岸や防潮堤を見学したり津波の映像を見たりした。田老は昔から津波に襲われることが多い地域であり、津波の注意が書いてある石碑が建っていたり「万里の長城」と呼ばれるほどの防潮堤が建っていたりして「防災の町」と言われていた。その他にもスムーズに避難できるように町を碁盤の目のように整備したり避難道がつけられていたりしていた。これほどたくさんの取り組みをしても200人近くの死者(人口約4500人)がでてしまったことに驚いたし、一番大事なのはいかに危機意識を持つかということだろうと思った。さらに、壊れた防潮堤の修復に関して、次は14mの高さになると聞いた。14mは、田老にきた津波の中で2番目に高い津波で一番高い津波に標準を合わせてしまうと油断してしまう人が多いからだということを知り、全ての津波を防げるわけではないしそんなに高いと波が見えなくて逆に危険ではないのではないかと思った。また、都市直下型の地震が予想されている中で海の方に実家があるので地元と比較すると田老ほど津波に備えていないし高台もないので不安に思った。

2日目は、ハックの家で行われている事業を見学した。ハックの家では、織物やパン、ルアー、漬物など様々なものが就労支援の中で作られていた。障害児のための放課後等デイサービスも行われていた。初めに見学したピーターズバーグは、パンやハックで作った織物雑貨を売っていた。地域のデザイン学校と連携していて、とてもおしゃれな内装だった。大阪で見学した「み・らいず」でもおしゃれな感じだったので、今までの福祉のイメージを変えることができるきっかけになると感じた。ハックでは誰がスタッフで誰が利用者なのか分からないほど全員が対等な関係で打ち解けていた。織物をしていたところでは、全員が同じ方向を向いてやるのではなく、床に座って織っている方や封筒に絵を描いている方など思い思いにやっていたので自由な雰囲気が感じられてとても居心地の良いところだった。ハックの家で震災時に、自閉症の利用者で他の利用者の家族の車のナンバーを記憶していたために、避難所などを巡って無事に全員を家族のもとに送ることが出来たという話を聞いてとても驚いた。あわせて、ハックがいつもはボランティアをされる側だけど自分たちもボランティアをしようということでボランティア活動も行っていると聞いて、自分が知らないうちに障害者は支援する対象でしか見ていなかったということに気付いた。岩手の調査旅行では、被災者や支援される側の気持ちについて考えることが多かった。また、学ぶ防災でも実際に津波が襲った場所を見ることでより現実的に感じられたが、被災した人の気持ちを分かることはできないのではないかとも思った。しかし、どんな対象者に対しても同じことは言えて、自分がどれだけその気持ちを分かろうとするかが大切なかもしれないとも思った。

岩手県調査旅行を終えて

大学院養護教育専攻1年 池田佳織

共生の社会を目指す現代においても、社会福祉施設と地域社会との関係は根強いものであるとは言いきれない。地域住民の中に、利用者や施設に対し、偏見やネガティブなイメージなどを抱いている者が多くいるからである。しかし社会福祉とは、地域社会の住民の社会生活上の困難に

対する自発的解決の努力を、地域住民が共同して援助する行為であって、地域社会から離れては成立しないものである¹⁾。そのため、社会福祉施設が積極的に地域住民にアプローチすることで、利用者や施設について地域住民の理解や協力を得られるようにしていく必要がある。

今回見学した「ハックの家」の事業所では、地域との交流を図る活動を積極的に行っていた。例えば、普代事業所の「ピッツバーグ」というカフェでは、知的障害の利用者が従業員として働き、パンを販売したり、ピザを作ったりしていた。ハックの家では、利用者がかばんや服などを織っておりそれを商品として販売しているという。これらの活動は、社会福祉施設と地域住民の双方向の交流が可能となるため、地域社会との関係が向上することにつながる有効な手段の一つである。

調査旅行の中で東北の被災地を訪れ、閑散とした町を見て被害の深刻さを実感した。訪問日当日は、気温が低く、風も強かったため非常に寒く感じたが、震災当日も同じくらい寒かったという。目の前で住んでいた町が流され、大切な人の命が奪われ、心身共に冷え佇む人々の姿が思い浮かび、その悲しみや辛さははかりしれないものである。そのような辛い経験をした2人の女性の話を聞き、共通している部分がいくつかあると感じた。第一に、悲しみを乗り越え、前向きに頑張れるのは、自分の役割や居場所を見いだせたことが大きいのではないかということである。施設で一緒に働く職員や利用者を心の支えとし、「学ぶ防災」のガイドとして震災当時の状況を伝えることを励みとしていた。ここから、震災による大きな喪失感を乗り越えるためには他者との関わりが重要であることを改めて実感した。

第二に、2人とも人々が震災を忘れず、防災意識を高めてほしいという思いがとても強いということである。講話の中では、「備品をそろえること」「とにかく逃げること」など防災意識を高める重要性を繰り返し訴えていた。田老市のある中学校では、震災時に生徒が自分達で判断して高台に登り、幼稚園児らも避難させたという。困難な状況の中での咄嗟の判断は防災意識の高さの現れである。これらの経験談からも、防災意識を高め、災害に備えることの重要性が伺える。東日本大震災から4年が経ち、防災意識が震災当時よりも低くなっている今、再度震災を振り返り、意識を高めていく必要がある。

<参考文献>

1) 藤原慶二：地域社会と社会施設のあり方に関する一考察―「施設の社会化」の展開と課題―、関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 第12号 p27～34、2009年3月

つなプロ岩手調査旅行レポート

総合社会システム専攻2年 中山はる香

私が今回の視察で感じたことは、実際に足を運ぶことの重要性です。今回、岩手の実際に被災した地域を訪れて、新たな発見が多くありました。東日本大震災が起きてから、被災地の状況を伝える報道は今までに多く行われており、私はどちらかというと、それらを積極的に取り入れている方だと思っていました。しかし、実際に行ってみて、肌で感じて初めて知ることが多くありました。例えば、田老の防潮堤の高さを、知識で知ってはいても実際に見てみないとその圧迫感

のようなものや存在感までは分かりません。私は、知識不足で、防潮堤を新しく作ることに反対している人がいることは知っていましたが、それは財政面によるところが多いのかな、と感じていました。しかし、防潮堤を見て、こんなに大きなものが家の近くにあることの不快感も大きくあるな、と感じました。また、どんな防潮堤がこわれたのか、や、防潮堤を超えて波が来ても防潮堤があり続けることの有用性など、実際に津波を体験した人だからこそできるお話が多く聞くことができました。福祉における調査では、人の心などを重視したものが多くなると思います。しかし、人の心や置かれている状況は千差万別であり、できるだけ正しく知ろうとしたとき、その現場における、とてもきめ細やかな調査が必要になってくると思います。そういったことから、改めてフィールドワークというものの重要性を感じました。

また、今回、訪問した NPO 法人ハックの家では、地域福祉に取り組む NPO 法人の自由度の高さと可能性について考えさせられました。ハックの家は、職員の竹下さんのおっしゃられていた通り、ハックの家の中にいる誰が職員で、誰が利用者で、誰が地域の人なのかが分からないようになっていて、堅苦しい「福祉」を行っています、支援を行っています、といった雰囲気があるように感じられました。なんとなく集まった人がきままに仕事をしている、といった風な、いい意味でゆるい雰囲気があるな、という印象を持ちました。ハックの家は、いつも、多様な地域の人や利用者さんを「ゆるく」つないでいて、そういった経験から、粘土のように様々な形に姿を変えて様々な状況に対応しながら、人々をつないでいけるのかな、と感じました。どんな状況、どんな人にも対応できる、対応しようとする、といった姿勢は、震災のような、とりあえず人が人とつながって協力して乗り越えていかなければならない、といった混乱した状況において、とても大きな底力を持っているのではないかな、と感じました。地域福祉において、柔軟性があるということは、とても大きな強みになると大阪の「み・らいず」でも感じたところでした。組織が様々な柔軟性を持つうえで必要不可欠なのは、他分野の職種の人と協力していくことです。私はここにおいても、組織における様々な分野との協力の必要性のようなものを感じさせられました。

岩手調査旅行 レポート

総合社会システム 2年 中島友恵

今回の調査旅行は、被災地に行く 3 度目の機会となった。1 度目に訪れたのは、震災が起きた翌年で、そのときはがれきの山と地面にまだ落ちている日用品の数々を目にした。2 度目に訪れたのは、震災が起きて 2 年が過ぎたころだった。この時は、がれきはほとんどなく、更地の状態が目立っていた。そして、今回。各地で復興の工事が始まっており、宅地の整備が進められていた。行く度に、その時被災地が抱えている大きな問題を目の当たりにしてきた。

今回の一番の学びは、「被災地の、本当の声とは」を、深く感じられたことである。岩手県宮古市田老地区を視察へ行ったとき、新しくできる防潮堤が 10 メートルを軽く超えるということに対して、海がある街なのに、防潮堤があるせいでまるでその町が『要塞』になってしまうという意見があることを知った。確かに、復興の際には、防災の街を作ることは重要だ。しかし、どこまで人を守るための設備を整え、どこまで人が自然に生きられるかをもっと国や都道府県、専門

家、住民一人ひとりが考えていく必要があるのではないだろうか。また、田老地区に震災前にあったX状の防潮堤は、世界最大級のものであり、その防潮堤の海側にいた人と陸側にいた人では大きく生存率が変わったそうだ。防潮堤の海側にいた人は、守られていないので、「逃げる意識」があったので、ほとんどの人が逃げて無事であったそうだ。一方で、陸側の人は、防潮堤がある安心感から「逃げる意識」が低く、多くの方が防潮堤を破った津波に流されてしまったらしい。いくら、防災の設備が整っても、人々が「防災意識」を持っていないと、惨事は防げないということ学んだ。復興と暮らしと人々の意識。これからの大きな課題と言えるのではないだろうか。

そして、新たな被災地の声を耳にした。「震災後、町が昔に戻った気がした。100年に一度は津波が来て、そのたびに海岸近くの家をすべてさらっていく。その昔の教訓を生かして『この先、家を建てるべからず』などという石碑が建てられているにもかかわらず、人々は利便性を求めて海のほうへ降りて行ってしまふ。震災は悲しいもの。でもそれ以上に私たちは海の恩恵を受けてきたし、海と共に生きてきた。なので、津波は仕方がない。」ガイドさんが、お年寄りの声として紹介してくださった。そういう感じ方もあるのだな、と思った。

今回の調査旅行で、違う視点をたくさん手に入れることができた。今回は「福祉」や「教育」といった限られた分野だけではなく、「人が生きる」という大きな土台で、様々な分野（財政、政策、医療・・・）で総合的に見ていく必要があるのだな、と強く感じた。

岩手調査旅行 振り返りレポート

総合社会システム専攻3年 猪岡友紀

東日本大震災から3年が経とうとするなか、今回岩手県の被災場所を訪問し当時の被災地、そして今という現状を実際の地から見て感じる調査旅行であった。私は今まで実際に被害にあった場をこうして間近に見ることは今回が初めてで、実際の場所で実際に起きた映像を動きあるものとして見ることでより一層現実的で震災という確かな現実とそして、復興に向けた歩みのなかにあるということを感じた。まずは、田老という町を訪れて、ここは昔から津波の町と言われるように実際にも大きな津波を経験してきて、そのたび防潮堤もつくられてきた。また、町はすぐに逃げられるような道路のつくりになっており、高台への道は車いすでも通れるようなスロープになっているというお話を聞いた。過去の教訓から被害は小さくなっているけれど、この東日本大震災での被害は確かにあり、このような津波に対する整備がなされているなかでも、被害が生まれてしまったことは、物質的な対策だけではなく、人々の防災に対する意識というものも大きく関係しているということを感じた。防潮堤を高くすれば高くするほどよいのではなく、高ければかえって津波や海の様子に気づくことは出来ない。また、大丈夫だろうという意識を生み出してしまふということが挙げられた。みんなが逃げていないから、今までが大丈夫だったから、専門家や評論家が言うから、などといった気持ちや考えが、防災を妨げてしまふと言われ、いざというときの逃げる意識というものの必要性を感じた。また、震災によって町から出て行ってしまった人もいるが、津波の被害を受けてもなお、この場所で生活し暮らしていく人々にとって、町を再建し生計を立てていくことも生活のためには欠かせないことであるということも改めて感じた。だからこそ

地域で暮らすということ、津波のある町で生活していくこととはどのようなことなのかを考えていく必要があると思った。

また、ハックの家やピーターズバーグを訪問して感じたことは、まずピーターズバーグにおいては、店内は親子づれやひと休みに入りやすい雰囲気であり、内装もこだわりが沢山あって、障害のある人が働く事業所ということで距離が出来てしまうことなく、入りやすく地域になじみやすいお店であるという印象を受けた。また、ハックの家も小さな仕事場が近くに集まっており、それぞれが歩いて行ける範囲にあるということは、自分の仕事だけでなく、自分の仕事以外の仕事というものの存在を知ることが出来るという点がよいのではないかと思った。これらの事業所を訪問して共通して感じたことは、それぞれがそれぞれの仕事場できちんと役割があり、自分のすべきこと、仕事があるということである。そのため、働くというイメージがしやすくなるのではないかと思った。また、職員やスタッフと利用者という目に見える区別をしていないということを知り、地域の人が自由にふらっと立ち寄り、出入りできる場であったり、学校終わりの子どもが集まったりと、世代や障害というものを越えて地域の人々が交流できる場であると感じた。

今回この岩手を訪問し、震災前と震災後では当然ながら全く同じようにはいかない現状のなかで、例えばハックの家でも震災前にやっていた魚の作業とはまた違ったパン屋であったりを行っており、震災に向き合って新たな取り組みというものが進められているということ、そして新しいまちづくりが着実に進んでいるということを感じた。

岩手調査旅行

総合社会システム専攻3年 藤井彩加

震災から3年目を目前としたとき、私は初めて被災地を訪れた。ボランティアに参加することも考えたし、自分の目で見なくてはならないとも感じていた。だが、テレビ画面を通した映像を受け止めることが精一杯であり、現地に赴いて現実を目にしたときに受け入れられる自信がなかったのだ。3年目を迎え、映像で見た震災直後のがれきに覆われた情景からは変わっていた。それでも、自分が遠く離れた愛媛で過ごしているとき、同じ時間に起こっていたとは信じられなかった。

ハックの家の方からも震災当時のお話を伺った。これまで復興支援に入ったNPOなどの話を聞く機会は多くあり、その中では「障がい者の支援」を目的としたものもあった。当時の様子を聞くと、震災時、海岸の砂浜にハックの家の利用者と職員の方がいたということであった。津波の前に海が引いたとき、浜に取り残された魚などを見て利用者の方は楽しそうにしていたようで、津波の危険を察知した職員の方々が利用者とその場を離れるのに苦労したと言っていた。ハックの家の竹下さんも「彼らにどう分かってもらうのか難しいところ」「津波を想定した避難訓練が必要」とおっしゃっていたが、非常時にその危険を察知出来なければ、察知したとしても対応を知らなければ、命を危険に晒すことになる。防災の意識を持つことと同じように、日頃からの積み重ねが重要であると思った。

また、竹下さんからのお話で驚いたのが「自閉症の方が利用者の家庭の車のナンバーをすべて覚えていたおかげで、利用者と家族の引合せが出来た」という話である。先に書いたように、障

がい者は支援の対象とされていた。だが、ただ支援されるだけの存在ではないということを改めて考えさせられた。また、非常事態のなか、本人のもつ力を最大限に活かそうと判断した職員の方もすごいと感じた。常日頃から、本人と向き合い理解していることやストレングスの視点を持って関わっていることがあってのことではないかと思う。

この視察の中で最も印象に残っている言葉のひとつが「みなさんのおかげです。ありがとうございます。」という地元の方の言葉である。悲しみに苛まれるばかりでなく、感謝の気持ちをもって前に進もうとする地元の方々の強さを感じた。一方で、「してやった、してやったと言われても嬉しくない。頑張れ頑張れというけど、際限ないんだよ」という言葉が忘れられない。これは宿で声をかけてくださった地元の方に言われた言葉である。その言葉の背景はたくさん考えられる。震災前のように自分たちで暮らしていくことの出来ないじれったさがあるのかもしれない。してやったという言葉が投げられたのかもしれない。相手には善意のつもりであってもその方には不快なものであったのかもしれない。ほかにもたくさん考えられるが、受け手にとって気持ちのよいものとは何であるのか、今後も考えていかなければならない自分自身の課題となった。また、際限がないという言葉に、「地元の方にとってこの震災の終わりは来るのだろうか。何をもちて復興したと言うのか」と考えさせられた。震災前と全く同じ状態に戻ることは出来ず、さらなる防災ということで街並みも変わっていくだろう。どのような状態になって初めて復興したと言えるのか現段階で答えを出すことが出来ない。これから先、時間が経っていつか分かる時が来るのだろうか。復興という言葉が使われなくなったとしても、それは周囲がそう思うだけで地元の方々にとってはちがうかもしれない。当事者である被災者が取り残されることのないよう、風化させないように皆が考えていかなければならないことなのではないだろうか。

自分の無力さを感じ、たくさん課題にぶつかり、答えの出せないまま悩み続けるばかりである。被災地を訪れて学ばせていただくばかりであり、何も還元できないことが申し訳なくもあるが、こうして考えることが風化させないことでもあると思えば、意味のあることなのかもしれない。辛い経験をひとつひとつ丁寧にお話してくださり、今回の視察を受け入れてくださった地元の方々への感謝の気持ちも忘れてはならないものである。今後も、自分に何ができるのか、考えていきたい。

岩手視察ふりかえりレポート

総合社会システム専攻3年 箕輪真菜美

東日本大震災後、初めて被災地を訪れた。海岸沿いはどこも重機による工事が行われており、移動中のバスからは仮設住宅らしき建物も見ることができた。学ぶ防災で見学した田老はもともと津波の多い地域であることを踏まえたまちの構造になっており、防災のまちとして知られていた。しかし、防潮堤の上から見た田老地区の町並みは海側には仮設のワカメの工場などが建てられているが、家が立ち並んでいたはずの山側に民家は残されていなかった。今までもテレビの映像で津波の様子や被災地の様子を何度も何度も見てきたが、実際にその光景を目の前になると何の言葉も出なかった。

今回の津波の高さを想定し、以前より高い防潮堤の建築を予定する自治体も多いという。しか

し、それには住民の反対も多い。高い防潮堤はまるで要塞のようで、海の様子が見えなくなるからだ。また、海の様子が見えないということは、もしまた津波が来た時も津波が見えないということだ。田老地区ではしっかりとした防潮堤があったことや到達予想が3mと低かったことなどから、危機感を持たず避難しなかった方もいるそうだ。したがって、防潮堤が高くなればなるほど住民たちの危機感がより薄れるのではないだろうか。建設予定の15~20m程度の防潮堤では東日本大震災時の30m級の津波を結局は防ぐことはできない。ならば、ある程度の高さの防潮堤を建設し住民たちが防災意識を高め続けられるような取り組みを考えた方が良いのではないかと思った。「そもそも津波が多いとわかっているなら高台に住めばいい。そうすれば犠牲を減らすことができる。」外部の人間がそう言うのは簡単だ。しかしそこに住む人々にとっては漁業こそが生業であり、海の恩恵を受け、海とともに生きてきたのだろう。百年に一度の津波に備えることと、今の生活・これまでのこれからの生き方を天秤にかけ、海の近くに住むことを選ぶことが愚かだとは私は思わない。だからこそ、地震発生後に危機感を持つことや日頃からの避難場所や避難経路の確保、防災訓練等を怠ってはいけない。再び来るであろう大津波に備え、東日本大震災での教訓を風化させずに後世に伝えていくことは課題の一つである。

わたしが今、できることはなんだろうか。救援やがれきの撤去に目途がつき業者による土地の整備が主立っている今、必要なボランティアの一つとして震災後にひきこもりになった子供たちの支援が挙げられた。だが正直、被災地で人と深く関わっていいものなのかと不安を感じる。被災者の皆さんが失ったものは大きく、生まれ育った町が流されてしまったことや大切な人を失う現実を同時に経験した被災者の気持ちや悲しみの深さは私の想像の範囲を超えているからだ。また、被災者の抱えるその気持ちを私自身が受け止める自身が私にはない。ただ、寄り添うことならできるかもしれない。しかし、被災者にとって突然やってきたボランティアの寄り添いは必要とされていないのではないかとも思う。ボランティアのありかたについても、考えることが多そうである。中には、「被災地にボランティアに行った」というステータスを求める人も少なくないように思う。現在も数は減ったとはいえボランティア活動は行われているはずだが、それらは本当に被災者が必要としているものなのだろうか。自己満足のボランティアはありがた迷惑でしかない。つまるところ、現在の被災地・被災者は何を求めているのだろうか。ボランティア活動に際しても、ニーズを明確化したうえでの適切な支援のコーディネート必要性を感じる。

復興の終わりはいつくるのだろうか。どのような状態になれば復興したと言えるのだろうか。まちが流され、多くの命が奪われ、生き残った人々は家も仕事を失い、まちを離れた人も街に戻りたくても戻れない人もいる。もはや震災前の状態にも戻すことは不可能である。また、震災を受けて浮き彫りになった地域の課題も多く存在する。家が建てば、商店街ができれば、人は戻ってくるのだろうか。3年経った現状を見る限りでは、ハード面での復興も程遠いようには感じた。

課題ばかりが浮かんでその解決策を見つけることができず、自分ができることが何であるのかも見つけられないことに無力感を感じるばかりである。しかし、岩手訪問により改めて被災地について考えることができたことを現時点での学びとし、今後何らかの行動に移していければと思う。

東日本大震災から3年が経つ。私は、2011年3月11日のあの地震を地元の福島県で経験した。その瞬間は高校の授業中だった。携帯電話の緊急地震速報が一斉に教室中に鳴り響いた。その直後、今までに経験したことのない揺れが生じ、教室の棚やロッカーは倒れた。私たちは何も考えることができず、机の下に隠れるという事さえも数十秒経ってからでないと行動に移すことができない程であった。揺れが治まると、一斉に校庭に避難した。普段の避難訓練のような避難はできずパニックのようになっていた。割れた窓ガラス、校舎のひび割れ等、震災の規模を目で感じることができた。雪の残る校庭で携帯電話を使って家族の安否を確認、震災の情報収集を必死に行ったことを今でも覚えている。揺れが治まったかと思うと、福島原発の事故が発生した。放射能の危険性と同時に余震の恐怖、ライフラインの停止、食料不足、ガソリン不足等さまざまな問題が次から次へと私たちを襲った。この震災を経験する中で、人々とのつながりの大切さ、家族の大切さ、資源の大切さ、防災の大切さを学んだ。月日の経過と共に忘れかけていた“震災から学んだこと”を、今回の視察を通してもう一度考え直した。

今回の視察では、初めに岩手県宮古市田老を訪問した。きれいな街だな、この町を訪れてはじめて感じたことである。これには2つの意味がある。1つは、津波の恐ろしさを指す。震災前後の写真を見比べてみると、家や田んぼグラウンドなど生活感の溢れる街並みであるのに対し、現在は何もない平坦な地面が広がっていた。たろう観光ホテルで当時の津波の映像を拝見させて頂いた。まさに文字通り“波がまちを飲み込む”様子がそこに映し出されていた。家、車、木、工場すべての物が波に流されていった。その映像を見たときに私は身体が震えた。その波の威力は想像を絶するものであり、自然の力に対する人間の無力さを感じた。それまでそこにあった物、人の命、津波によってすべて奪われて何もなくなってしまった街を見て、自然の怖さというものを実感した。もう1つの意味は、復興状況を指す。瓦礫などは一切なく、仮設ではあるがわかめの乾燥工場があったり、自動車や人の交通があったり、田老のまちでの人々の生活の様子を伺うことができた。何もなくなってしまい、瓦礫の山だった震災当時から想像ができない程、きれいに片付いていた。たった3年のいう短い月日の中で、これだけの復旧がなされるとは正直驚いてしまった。その背景には人々の身を削るような努力があったに違いない。街を愛する心、震災に負けない強い心、互いを思いあう心がこの街の復興を後押ししたのだろう。震災の特集番組でよく聴くこの言葉だが、その本当の意味を今回はじめて理解できたような気がした。しかし、一方で、翌日訪問した明戸の海岸には崩れたままの防波堤が残っていた。それまでサーフィンやキャンプをする人が大勢訪れていた海岸は、震災後から訪問客はめっきり減ったそうだ。それまでそこに無かった石ころは津波が持ってきたものであり、枯れてしまった防潮林は津波の高さを表していた。震災前の姿にもう戻らない海岸は閑散としていた。昨日までそこにあったものがなくなり、昨日まで一緒に話をしていた人がいなくなり、大切な人、ものがなくなってしまう…。田老の人々は一体どんな想いで流されていく街を見ていたのだろうか。考えるだけで胸が痛む。だが、私のこの痛みの何十倍、何百倍もの痛みや苦しみを乗り越えて今があるのだろう。ガイドの

方は、県内外からのボランティアの協力があつたからこそここまで来ることができたとおっしゃっていた。特に、ボランティアの方々が子どもたちに寂しい思いをさせることがないように触れ合ってくれたおかげで、子どもたちが心を壊さずに済んだ、というお話には心を打たれた。震災の直後から、市外から避難してきた方に対するボランティアの勧誘が地元であつたが、私よりも辛い現実を目にしてきた被災者の方々とどう接して良いのか分からず、ボランティアに対する不安があり実行に移すことができなかった。この時のことを今、非常に後悔している。最も近くで、少しでも力になることができたのかもしれない。あいさつや少しの会話で心の支えになれたのかもしれない。震災直後、そばに家族がいてくれたことがどんなに大きな心の支えだったのか、私自身が良く知っていることであるのに、と後悔の念に駆られた。同時に、今の私たちには何ができるのだろうか、それをこの視察の中で考えた。

現在生じている問題のひとつに、震災の後遺症により自殺やひきこもりになってしまう人々が驚くほどに多いということがある。第1の住処が流されたことにより、第2の住処である仮設住宅での暮らしがやむを得ない被災者が大勢存在する。仮設住宅の中には、雨漏りや隙間風がひどく、岩手の寒さを耐えることが厳しい住宅もあれば、仮設住宅の中にプライベートな空間もなく家族関係がぎくしゃくしてしまう事例は少なくないという。仮設商店「たろちゃんハウス」で出会った子どもたちに、どうして外で宿題をしているのか聞くと、家（仮設住宅）の中では宿題をしたくないのだと言う。これもやはり勉強に集中できるようなプライベートな空間が確保できていないことを明らかにしているのではないだろうか。また、第3の住処として移住が考えられるが、それは地元で培ってきたコミュニティの崩壊を意味する。見知らぬ新しい土地で暮らし、生活に慣れるまでにはかなりの体力を使い、精神的な疲労も外すことはできないだろう。そうした現在の状況下で心を壊してしまう人々が少なくないことが現状である。そうした現状を少しでも改善するために、“ナナメの関係”といった存在において、私たちに支援ができるのではないだろうか。前回の大阪視察で伺った「NPO カタリバ」今村さんのお話を思い出した。近すぎず、しかし身近で少し刺激のある存在である“先輩”に自分の想い、悩みを打ち明けることで、問題解決、自己実現のヒントを得るという活動がある。実際にカタリバは“コラボ・スクール”という形で、被災地の子どもたちに居場所を与え、よき心の理解者になっているようだ。私は、「NPO 法人ハックの家」を見学させていただき、震災の辛い現状の中でも、明るさを忘れないことがどれだけ大切なことであるかに気付いた。ハックの家では、障がいを持った方もそうでない方も、全員が生き生きと仕事をしていた。夢や目標に向かって仕事をする人、自分の個性を仕事にぶつける人、ハックの家の人々はみんな笑顔で明るく生きていた。暗く落ち込んだときもあったそうだ。その現実を受け入れ、明るく前を向いて生きていく強さを持てるようになったのは、1人ではなく支え合う人々がいたからだとおっしゃっていた。現在苦しんでいる人々の中にも、ひとりで孤独と戦わなければいけない状況にある方が多いのではないだろうか。子どもでも大人でも孤独がもつとも辛く悲しいことである。そうした人々に“ナナメの関係”によってアプローチし、明るさを少しでも与えることは今、私たちにできることではないのだろうか。距離が遠く直接会えなくても、ネットやメール、手紙でのやり取りで力になることはできるのではないだろうか。そして、1人になることがないように“居場所”を被災地は、今後求めるようになるのではないだろうか。子どもたちが一緒に遊ぶ場所、勉強する場所、大人たちが情報交換する場所、お年寄りの知恵を

伝える場所など地域に暮らす人々の“居場所”を築くことが必要となっているのだろう。

今回の岩手視察を通して、今まで避けてきた東日本大震災について、もう一度見つめ直すことができた。ちょうど3年経つがまだまだ解決されずにある問題は山積みである。地元の福島県にも、これから向き合っていかなければならない問題は多々ある。これを機に、被災地の現在に目を向けたいと思う。そして、あの震災から学んだことを胸に刻み、これからの学びに活かしていきたい。

岩手調査旅行レポート

総合社会システム専攻2年 数野 彩

今回は震災から3年経つ被災地の視察、またNPO法人ハックの家を訪問させていただいた。私は震災から1年後の釜石市に1週間ボランティアとして行ったことがあったが、変わったのはガレキが片付いたことだけで、人々の活気、まちの活気は依然として戻っていないように感じられた。岩手は3月になっても雪が降り、気温も東京に比べてずっと寒くて、そんな状況の中仮設住宅で暮らしている人がまだまだいることを聞かされ、復興の難しさを改めて思い知った。支援も一人二人と段々といなくなり、人々は次第に忘れていっている流れがあるが、地元に残った人たちは前向きで復興へのパワーが強く感じられた。

1日目に「スーパー堤防、防災のまち」と呼ばれた田老に行ったが、無残に堤防は崩れ、頑丈そうな外見に対し中が砂や砂利という決して頑丈とは言えないものであることに驚いた。津波でさらわれた人たちもその堤防があることで、「どうせ堤防が守ってくれる」「いつものことだ、大したことないのだろう」という油断をして命を失ったというお話を聞き、安心が一番危ないのだと思った。安心は人の心に油断をうみ、繰り返されるうちにその油断や過信はますます大きくなり、一瞬の判断を鈍らせる。私たちは東京に住んで特に非常食や避難経路の確保などをしていないが、何かあった時にそれが命取りになると今回の被災を見て学び、防災を実践していかなければならない。亡くなった人の数だけ教訓が増えていくのであり、それを私たちは無駄にしてはならないのである。2日目に仮設商店街に立ち寄った際に、その商店街にお店を構える方に声をかけられた。学生であり、被災地の見学・勉強に来たことを伝えると、「ただ見て『あー怖い、すごい』で終わらせないでほしい。ここで見て、聞いたことを君たち若者が伝え、考えてなければならぬのだよ。それを忘れないでほしい。」と言われ、自分が被災地の現状に呆気をとられていることにはっとした。感心していないで、私にできる被災地の支援は何なのか、どうやって被災地の現状を多くの人に伝えようと考えなければならないということを思い出した。まず、身近な友人や親に伝えて、そこからさらに多くの人にどうやって伝え、支援の輪を広げるのかは私たちにかかっていると言える。しかし、支援といっても被災者の方々が抱えるニーズはバラバラで、一様にまとめてしまうと誰かの権利を傷つけてしまうこともある。例えば、はやく仮設を出て家に住みたい人やまた新しいコミュニティをつくるのは嫌だから仮設にとどまりたいという人、被災した建物を残しておきたい人と壊してほしい人などと色々なニーズがあって、福祉はそれらひとりひとりの人の話を聞いてニーズをくみ取って調整していくべきである。しかし、被災者は数えきれないほど多く、1人1人の声を聞くのは難しい。そこで、私たちなどの介護や理髪のような

専門的スキルを持たない人でも話を聞くことはできる。ゆえに、私たちにできることはできるだけ多くの人のニーズを聞いて支援へとつなげることではないかと考える。そうやって小さいことからコツコツとできることをやりたい。

また、今回ハックの家を見学させていただき、障害を持っていても働くことは難しくないということを学んだ。障害者は労働力にならないとって雇ってくれない企業は多く、結局保健サービスなどの援助や作業所での少ない賃金で生きるしかない障害者は、自立したくてもできないという人が多い。しかし、ハックのようにビジネスと障害者をつなぎ、地域で働けるというのは非常に素晴らしい取り組みである。施設や事業所を見ても、職員と障害者に壁はなく、「障害」というマイナスな印象を受けることはなかった。さらに、地域の人たちとの結びつきが強く、パンを買いに来る常連さんや地域のお祭りを見て障害を持っていても持っていなくても住民として自由に生活していた。一般的に人に助けられてばかりという印象もある障害者の人が逆に高齢者を支援する取り組みや、地域の人に障害者の人が染物やパン作りを教える取り組みなど、障害の境目の無さは他の施設のお手本だと感じた。

最後に、被災地を見たとき、空き地ばかりでもともと家があったことさえ想像できないようになっていて、津波の恐ろしさを再び感じ、地震への恐怖心や悲惨な出来事を忘れている自分はなんて甘い人間なのだろうと思った。当事者じゃない私たちはついつい恐怖や悲しみを忘れていてしまい、また同じ事態を引き起こしたりしてしまう。しかし、今回の調査を通して、巻き込まれた人たちの命の重さを汲み取り、未来へとつなげていなければならないということを改めて思うことができた。また、被災地で暮らす人々の復興の灯はまだまだ燃えていて、私たちもずっとその灯を受け継ぎ、支援していきたいと感じた。